

▼：改頁

さてその後、大箱はその夕暮れに忙わしく味鴨に立ち別れ、家路を指して急ぐ折から、たちまち後ろに人あって、「御書役様、待たせたまえ」と慌ただしく呼び止めるのを驚きながら見返れば、是すなわち虎魚なり。その時、虎魚は足早に走り寄りつつ小腰を屈めて、

「この頃は何事やらん、鮑が道を切りたる如く※、私の方へは入らせたまわず、此の故に義太吉も御噂のみ申し暮らして、絶えぬ思いにうちも置かれず、迎えの人を参らせれば、お勤めが世話しいとて、お返事もそこそこなる。お腹立ちは何故やらんと思うのみにて、術も無く案じ暮してはべりしに、ここにてお目にかかりしは御縁の尽きぬ印なり。まげてしばらく私の方へ立ち寄りたまえかし」とかき口説きつつ引き止める、それ者の手練に大箱は素気(愛想)無くも答えかねて、

「それは云われる事ながら、もとよりこちに訳あって、行かぬと云うでは更々無し。常にも暇の無き身なるに、此の頃はいとどしく(非常に)※御用繁くて日が暮れねば、宿所へ退くことも得ならず。今宵とても去り難き所用があれば許してたべ。近きに手隙を見合わして、その折には必ず行かん。まずまずここにて別れん」と云いこしらえて、足早に行かんとするを引き止めて、

「それは余りに清くも無し。あなたがおいでなされぬ故に世の評判も良からぬにや。近き頃は夜稽古も繁盛せねば、朝夕の煙りの代もそれ程に手さえ廻らぬ糸道の細る世帯を哀れとも少しは思いやりたまえ。ここよりさのみ遠くもあらぬ私の宿所へ立ち寄って、すぐさに帰らせたまうとも手間暇の入る事にはあらず。いざさあさあ」と引く袖を又、今更に振り切って立ち別れんもさすがにて、行くとは無しに引かれるままに、遂にそなたへ立ち戻れば、行き来に賑わう夕月夜、浮かれ鳥に笑われて、浮かぬ心を引き立てる、音締めゆかの床の夜稽古や、掛け行灯に紛れなき、早その門に來にければ、いざまず入らせたまえて、虎魚はやがて門の戸をやおら開けつつ声高やかに、

「義太吉は二階に居るか。日頃そなたの思惑様が来たまいたるに、さあ下りて、さあさあ迎え申さずや」と慌ただしく、呼び張りたる声を聞きながら、義太吉は心の内に思う様、

「・・・我が身の思惑と云われるは安蛇子の刀自が来たまいたるにあらんずらん。それがあらぬか」とばかりに、塵落としの格子の隙より、密かに下屋を差し覗けば、安蛇子には非ずして、大箱が来るなり。義太吉は望みを失い、既に梯子を下りんとしつつが、再び二階へよじ上り、絶えて答えもせざりしかば。虎魚は又々、声を立て、

「そなたの思惑様が来たまいたるに、いかにぞや。さあさあ迎え参らせずや」と云うを義太吉は聞きながら、

「我は風邪の心地にて▼引き籠もって居るものをその方様も足はありなん。二階へ伴い参らせたくば、上るに難き事やある。いとおかしや」と愛想も無き答に虎魚は微笑んで、

「アレ聞きたまえ。義太吉はあなた様の御足の遠きを恨んで、心に無き事を申すにやあらんずらん。いざまず上りたまえかし」と云いつつ手を引き腰を押し、割なく二階へ誘うにぞ。大箱は今、義太吉がしかじかと云いつる事が胸にこたえて喜ばず、やがて踵を巡らして、帰り去らんと思えども、虎魚は既に気色を推して、二階の襖を立てこめて、その身は梯子の方に居り、又、義太吉にうち向かって、

「そなたは風邪を引きたりともさせる事とは見えざるに。たまたまお連れ申したる御書役様を慰め

申せよ。やよさあさあ」と云いながら、密かに目ませで知らせたる。母の心を推した義太吉はようやくに思い返して身を起し、さて大箱の辺へ来つつ、一別以来の疎遠を恨んで、浮世雑言口合いにしばしその座を持ちにけり。されば虎魚が大箱を割なく宿所へ伴いしは予ねてより目論見あり。いかにもして大箱を親しくここへ通わせて、色から仕掛けて義太吉を男妾にさせれば、賄い足りて親と子の朝夕は安かるべし。さるを又、義太吉が漫ろに罌を掛け、過って安蛇子と訳のありしより、はや大箱に悟られて足さえ遠くなりたり。安蛇子なりとてまんざらに為にならぬと云うではなけれど、大箱殿は上役なれば、又、それほどの銭はあるべし。今宵はここに一夜さ留めて、遂には一つ夜着の内に寝させんものをと胸の内に思う心を云えばえに云わねども、また義太吉も嫌々ながら、読みと歌、云いよる縁もあらんかとて、親子密かに馴れ合って、常にも増してもてなしけり。

さる程にその夜さり虎魚はまず義太吉に目くばせして、その意を諭し、さて大箱の辺近くに義太吉をはべらして、大方ならず慰めさせ、その身は下屋へ走り行き、酒を温め肴を整え、上り下りさえ違者なる客の心を釣ひ梯子、所狭きまで置き並べ、盃を上げ酌を取り、只大箱をもてなせども大箱は始めより、ここに立ち寄る心も無きに、先に義太吉が云いつる事の無礼緩息(無礼)、よくよく思えば、我を侮る言葉の端。いぶせく(不快に)※思うに疑い無しと、大方に推すれば、いよいよ心樂まず、さしうつむいて居たりしを虎魚は言葉を巧みにして、しきりに酒をすすめるにぞ、大箱これを辞するに由無く、僅かに受けたる盃をようやくに飲み干して、

「先にもしばしば云いつる如く、私は今宵逃れ難き要用がはべるなる。かかれれば酒も欲しからず。今宵はまず此のままに放ち帰すが第一の馳走にこそ」と云いこしらえて、立ち上がらんとしてけるを虎魚親子は押し留めて、

「今更事にかこつけて、立ち去らんと宣うとも、未だあつらえたる肴も来ず、夜食の仕度もしてはべるに、それを見捨てて帰らせたまはば、誰にか振る舞うべきや。さりとて暇の入るにもあらず。しばしくつろぎたまえ」とて、引き留めたるもてなしぶりに、大箱は持て余して心の内に思う様、「……その始め虎魚親子の落ち目をいささか救いしより、縁に引かれて思わずもここへ立ち寄りたりけれども我が身一つで若き男に近づかんこと、何とやら後ろめたき由もあれば、それより安蛇子を伴って相客にしたりしに、誰かはからん、その安蛇子は義太吉と訳ある由、▼人の噂の空言ならば、我が身も人に笑われなん。事にかこつけ義太吉親子の宿所へは立ち寄らじと思しものを今宵又、道にて虎魚に呼び止められ、割なくここへ伴われて苦しめられる転(嘆)き※よ、隙もあれば夜更けぬ隙に帰らんものを」と胸にのみ思えば浮かぬ酒盛りに困じ果ていでいたりける。

※鮑(いたち)の道：《イタチは通路を遮断されると、その道を二度と使わないという》行き来・交際・音信が絶えること。鮑の道切り。

※いとどし：さらにはなはだしい。いよいよ著しい。 ※緩息(かんたい)：①なまける。なおざり。②過失。科(とが)。③無作法。無礼。

※いぶせし：①ゆううつだ。②煩わしい。窮屈だ。不快だ。③けがらわしく、気味が悪い。

※うたて(転)：事態や心情が意志に関係なく移り進んでしまうさまを表す語。①ますます。ひどく。いよいよはなはだしく。②嫌なこと。嘆かわしいことに。③普通でなく。

○ここに又、名附屋卯亥蔵と云う筆商人ありけり。年頃大箱は御得意にて、親しく出入りする者なりしが、近頃又、十対の状書き筆をあつらえられて、その筆ようやくい出来にければ、やがて大箱の宿所へ持て行って、しかじかと云い入るるに、大箱が宿所に在らざれば詮術も無くもすござ

と家路を指して帰る折から、道にて相知る人に会いぬ。その人が早く呼びかけて、
「卯亥蔵は日が暮れるのに、まだ商いを終わらずや」と云われて卯亥蔵は
「さればとよ、宋公明村の大箱殿に十対の筆をあつらえられて遙々彼処へ持て行きしに。宿所に在らねば埒あかず、その行き先を尋ねんにもあなを知らねば無駄歩きして、常より遅くなりたり」と云うをその人聞きながら、
「大箱殿は先の程、閻八婆に伴なわれ、まさしく彼女の宿所の方へ赴かれしを我見たり。和主もし所要あれば、虎魚の宿所へ行ってみよ。大方、酒盛りの最中にてあらんずらん」とうち笑みながら、告げ知らせてぞ行き過ぎける。その時卯亥蔵は思う様、
「・・・彼の春雨の大箱殿はいと物堅き女中にて、且つ、仁心が深ければ、人の落ち目を救いたまうに財を惜しむこと無きを人にもをさをさ褒められながら、いかなればならずの虎魚親子に惑わされて、近き頃ややもすれば彼女の宿所を中宿にして、錢を費やしたまうにこそ、いと苦々しき事なりき。さもあればあれ此の頃は我が身の商いが暇なるに、あつらえられたる数多の筆を今宵の内に錢にすれば、明日の元手に乏しからず。かかれればここより閻八婆の宿所に至って、彼女の女中にこれらの筆を渡すべく、我もその座の相伴して、一杯飲まん」と思案をしつつ、それより道を急がして、虎魚の宿所に赴きつ、しばらく門にたたずんで内の様子をうかがうに、二階に人の笑う声が手にとる如く聞こえれば、
「・・・さては酒盛りの最中なり。折こそ良けれ」と進み入り、音ないもせず、ずかずかと梯子を上って膝まずき、「御書役様はここに御座せしな。さて、あちこちと尋ねました」と云うを大箱聞きながら、この座を囚らずして帰らんとする心を目配せに示してそれと知らせれば、卯亥蔵も心様の愚かなる者ならざれば、たちまちにその心を悟って、そらさぬ顔に言葉を改め、
「宋公明村の御書役様。先に御用の筋ありとて御館より幾度となく、御迎えが参りしかども、未だ帰らせたまわねば、御宿の人々は手に汗握るばかりなり。さあさあ帰りたまえかし」と云えば又、大箱も驚いたる面持ちにて、
「真に御用の筋が在りしを私にはたと忘れたり。さあ行くべし」と云いかけて、立たんとせしを虎魚婆は押し留めてあざ笑い、
「この卯亥蔵が小賢しく、無き事を世にあり顔に言いこしらえて、こちらのお客を引きいさんと囚るよな」と云うに卯亥蔵ちっとも騒がず、
「我、いかでかは偽るべき。先に御宿へ参りしに御宿にてはかくとも知らず尋ねわびつつ、追々に迎えの人をいだされたり」と云わせもあえず、虎魚婆は又、からからと笑いつつ、
「さて、巧んだり、こしらえたり。さる浅はかなる空言では三つ子なりとも欺かれんや。既に今宵は四つ過ぎなり。かかれれば御館は御夜詰め退けて、殿様は奥様と▼御寝なるべき頃なるに、よしや御用の筋ありとても御書役たちを召されんや。かく浅はかなる巧みにて、大事のお客を引かんとするは我が世渡りの仇敵。足元の明るい内、さあさあ出て行かずや」と罵りながらつと立って、卯亥蔵を引き捕らえ、握り拳を振り上げて、眉間をはたと打ち懲らし、勢い猛くかい掴み、そのまま下屋へ追い下ろし、はたと突き出し門の戸を閉ててしきりに罵りながら、その身は二階へうち上り、又、大箱を慰めけり。

○卯亥蔵は虎魚婆に眉間をしたたか打たれたる憤りに耐えねども、ここにて彼女と打ち合って、

事を引き出す事あれば、大箱殿の為ならずとて、得意思いにおめおめと門口へ突き出されて、又、入るべくもあらぬ身のいとど恨みに耐えざれば、二階を見上げ睨まえて、

「擦れ枯らし※の莫連婆め。今宵の事を覚えていよ。重ねて仕返しするべきに」と罵る甲斐も長櫃の荷を肩にして二階の家路を指して帰りけり。

さる程に虎魚は今宵大箱を留めんとのみ思いしかば、まずゆるやかに夜食をすすめて、中酒の銚子、盃の取りやりに、いどど小夜更け、丑三つ近くなりぬべし。かかりけれども大箱は既にして卯亥蔵に心得させし謀り事を早く虎魚に見抜かれて、なお悪どめに止められるをいと心憂く思えども、今更帰る由が無ければこれもまた、おめおめと彼女の心に任するのみ。萬は言葉少なにて、物食う事も無かりしかば、虎魚もさのみは強いかねて、まず盃盆を取り収め、

「御書役様、とてもかくても小夜更けて、丑三つ頃になりたるに、送らせ参らす人は無し。いかばかりに思し召すとも帰らせたまう事は叶わず。今宵はここに一夜さ明かして、明日の朝けに帰らせたまえ。いと見苦しくははべれども義太吉のかい巻きの小夜着も枕もここにあり。寝転びながら語らって、眠りたまえ」と己が云う事のみ云うて、忙しく一人下屋へ下りし時、密かに梯子を引き退けて、壁のあなたへ寄せ掛けたり。大箱も押し続いて、下へ降りんとしてけるに、梯子無ければそれも叶わず、その時密かに思う様、

「虎魚が割無く私を留めるは深き企みのある事ならん。よし、さもあればあれ、浮々と彼女らの罠にかけられんや。夜の明けるまでまどろんで、なおも彼女らがせん様を試みばや」と思案をしつつ、腰帯解いて前かき合わせ、さて懐の篋迫の紙入れ、筆筒、扇さえ、只三尺の置き床の辺りへ置いて、そのまま小夜を着引き掛け、枕をしつつ、壁に向かって臥したるを義太吉はうち見て、辺へ立ち寄り、「此の秋の夜の肌寒きに、お風邪召すな」と手を差し入れて、大箱の帯の端を引きつつしかと引き寄せるをすかさず大箱がばと起き、「此は何するぞ」とたしなめても義太吉は騒ぐ気色無く、「何をするとはい野暮らしい。更け行くままに肌寒を暖めさするが嫌かいな」と云いつつ、再び寄りんとするを大箱は方辺の煙管を取って、義太吉の額をはたと打ち退け、

「恥を得知らぬ痴れ者に云うは無益に似たれどもそちは私を見違えたるか、安蛇子に似たる者なりと思えば当てが違わんぞ。これにも懲りずに手を出せば、その度は許し難し。今後をきつと慎めかし」と罵り懲らせば、義太吉は額を押えて減らず口、

「肌寒い夜に風邪もや引かんとする情けを仇にして、自惚れらしいたしなめ口上。独り寝るとも風邪ひこうとも勝手にしたがいよいよ」と云いつつ少し退いて、足らぬ思いの三幅布団。我から狭き管薦の丸寝※は憂しと箱枕を引き寄せて一人臥したりける。

※丸寝（まるね）：衣服を着たまま寝ること。

これより後、大箱は眠るといえども油断せず、早く夜が明けよと思うのみ。心疲れていつの間にか寝るとも知らずまどろむ程に、枕に響く鐘の音に驚き覚めて考えれば、まさしく六つとおぼえたり。「時こそ良けれ、帰らん」とて、上がり口に立ち寄って、虎魚に「梯子を掛けよかし。はや六つになるに帰るべし」と声高やかに呼び立てれば、虎魚はようやく起きて来て、

「明けるにはまだ間もあらんに、今より▼帰って何にせん。逸って漫ろに立ち出て、後悔をなしたまいそ」と云いつつ梯子をもたげ起こして、元の如くに掛けしかば、大箱はそのままに早く下屋へ下り立ち、門の戸をやをら開けさせ、物をも云わず只一人、家路を指して走りけり。

※すれっからし（擦れっ枯らし）：「すれからし」の転 何度もひどい目に遭って素直でなくなり、ずるがしこくなること。苦勞して人

柄が悪くなること。

○さる程に大箱は腹の立つまま、鐘の数を定かには数えも果てず、虎魚の宿所を立ち出て、行けども行けども夜が明けねば、星の光を仰ぎ見るに、有明けの月傾けどもまだ七つには過ぎざりけり。

「さては七つの鐘を六つと思い違えしなり。悔しき事をしてけり」と思うものから、今更に後へ戻るもさすがにて、又、幾ばくの道を行くに、と見れば行く手の土手の辺に一軒の出茶屋あり。曉毎に早く出て、色里へ通って帰る浮かれ人の憩い処で世を渡る者にして、主人を与五平と呼びなしたり。この与五平の女房は去りし頃に身まかりしが、彼女が世に在りし時、雇いお針を生業にして、あちこちへ赴く程に、ある年、大箱も彼女を雇って衣を縫わせし事ありけり。これにより与五平とも予て相知る由あれば、大箱はこの所に憩いて明けるを待たんとて、葦簀の辺に進み入れば、主人の翁が出迎えて、

「此は宋公明村の御書役様、何事のおわしましてや、曉かけていでたまいな。只今煮花も煮え立ったり。まずゆるやかに憩わせたまえ」と云いつつ花香※を汲みいだす、茶碗に火鉢持ていでて、いざとてこれをすすめけり。大箱は右の手に茶碗を受けてうち飲みつつ、

「今日は御用の多かるに六つよりいでんと思ひしに、一時ばかり時を違えて、余りに早くいでたれば、ここにてしばし休まんとするて立ち寄りはずなり」と云えば、与五平は微笑んで、

「さては左様に候いしか。ここにて明かさせたまえ」とて、いよいよ茶をぞすすめける。

その時大箱は思う様、

「……此の与五平の女房が身罷りし頃、石塔を建てばやと思えどもその金無しと云いつるにて、我がその料を取らせんと口約束をせし事ありしに、その後はこれかれと日毎の勤めに暇無く、まだその金を与えざりき。今日は幸い懐中に五六両の金あれば、これを取らせて喜ばせん」と心の内に思いつつ、そなたへ向いて、

「ナウ、与五平。去ぬる頃、亡き人の石塔料を合力せんと約束はしたれども、事にまぎれて思わずも不約束にはなりにたり。幸い金子の持ち合わせもちとばかりあるなれば、只今それを参らせん。いでいで」と云いかけて、懐をかき探るに、その金を入れたりし鼻紙袋が無かりけり。大箱はひどく驚いて、

「……昨夜虎魚の二階にてまどろまんとせし時に、鼻紙袋も筆入れも置き床の間に置きたるを慌ただしくいづる時、取り忘れしに疑い無し。彼の紙入れの内にこそ、金もあれ、刺刀(腰刀)※もあり、使い馴らせし筆なれど、これらは全て失うとも今更惜しむに足るものならねど、賊が岳の砦より味鴨にもたらして、小蝶が送りし密書の一通。彼の紙入れに入れ置きしをもし義太吉に見られれば、我が身の大事になりぬべし」と思えば心慌ただしくて、又、与五平にうち向かい、

「持て来にけりと思いたる肝心の紙入れを忘れて残し置きたれば、金は更なり、茶代も無し。ちよと一走り宿所へ帰って、そを携えて又、来なん。しばらく待ちね」と云い掛けて、既に早身を起こすを与五平は急に押し止めて、

「その金ばかりの事ならば、帰らせたまうに及ぶ事か。石塔料はいつなりとも急がせたまう事に非ず」と止めるを聞かず大箱は

「否、それ▼のみの事にはあらず。他に忘れし物もあれば、いずれの道にも行かねばならず。しばし待ちね」と云いながら、そのまま茶店を走り出て、虎魚の宿所へ急ぎけり。

※花香（はなが）：①花の香氣。香りのよい茶。②におい。色香。心ばえ。 ※さすが（刺刀）：①腰に差す短刀。腰刀。②細工用の小刀。

○大箱は喘ぎ喘いで、元の宿りに走り帰って、門の戸しきりに打ち叩き、

「虎魚よ、ここを開けてたべ。ちと用あって帰りたり」と云う声、内にも聞き知りて、虎魚は渋々起きて来て、

「云わざる事か。まだ早きに。見たまえ果たして戻りたまいぬ。二階へ上って一眠り、豊かに休みたまうとも明けるには未だ程もあらん。いざいざ内へ入らせたまえ」と云いつつ、門の戸引き開け、内へ入れつつ鎖し（錠）※を閉めて、そのまま納戸へ赴いて、己が臥所へ入りけり。大箱は又、忙しく一人梯子をうち上り、置き床の間を尋ねるに、鼻紙袋は無かりけり。

これより先に義太吉は大箱が出て行きし時、小夜着引き掛け眠らんとて、布団撥ね退け起き出で、置き床の間の辺に到るに、大箱が忘れたる紙入れが在りしかば、良き物得たりと取り上げて、灯し火の影へ持て退き、

「此の紙入れは重やかなる。思うに金があるべし。今この金を巻き上げれば、安蛇子と度々楽しめる。うまい、うまい」と微笑んで、いで開帳と紙入れを探りいませば小判四五両、金入れに入れてあり。又、鋼良き刺刀あり。是のみならず一通の文殻（読んだ文）※がありしかば、心ともなく開いて読むに、江鎮泊の小蝶より送りし密書なりければ。且つ驚き、且つ喜んで、心の中に思う様、

「……世の人は大箱を仁義に厚き賢女なり、慈悲いと深き生き菩薩ぞと、誉めそやす事の可笑しさよ。賊が砦の謀反人らと、これらの状の取り遣りして、いと疎からず交わる大胆。もし此の事を訴えれば首の跳ぶべき罪人なり。此は良き物が手に入りたり。安蛇子に告げて訴えさせ、我を罵り恥ずかしめたる宵の恨みを返さんか。いやいやそれでは金に得ならず。詮術あり」と一人頷き、金も刺刀も一通も元の如くにへし込んだ鼻紙袋を懐へ、しかと納めて臥したりけり。

かくとは知らず大箱は鼻紙入れを尋ね詫び、空眠りをしたりける義太吉を揺り覚まし、

「そなたは私が忘れたる鼻紙入れを取りつらん。さあ返してたべ。是のう」と幾度となく揺り起こせば、義太吉はようやくに驚き覚めたる面持ちして、

「それを何しに知るものか。鼻紙入れの番はせず」と云えば、大箱

「さればとよ、そなたは先に布団をのみうち掛けて臥したるが、今はこの小夜着を着たり。かかれば夜着を取らんとて、あの置き床の辺近く立ちいでたるに疑い無し。その時取って隠せし事は鏡に掛けて見る如し。紙入れをだに返されれば、何事まれ云われる事を露ばかりも背くまじきに、さあさあ返したまえかし」と云うに義太吉はあざ笑い、

「小みづの推量（推測）まことに違わず、彼の紙入れは我が手にあり。それほどまでに欲しく思えば、我らが望む三ヶ条を皆事如く叶えたまえば、出してやるまいものでも無し。そを聞くべしや」と裏問う（探りを入れる）を大箱は聞きながら、

「三ヶ条とは愚かな事。百ヶ条でも我よく聞かん。そなたの望みはいかにぞや」と問われて義太吉はうち微笑んで、

「第一は明日よりして我は安蛇子と夫婦になるべし。萬事の仕度物入りを御身が引き請け賄いたまえ」と云えば大箱頷いて、

「それらの事はいと易し。私が賄い得さすべし」と云うに義太吉は

「第二条は我が安蛇子と夫婦になっても店賃、飯米、小遣いまで、御身一切仕送りたまえ」と言うをも大箱請け引いて、「それも又、心得たり。三ヶ条はいかにぞや」と問えば義太吉微笑んで、「江鎮泊の小蝶より送られたる三百両の金を残りなく、只今我らに取らせたまえ」と云われて、大箱は眉をうちひそめ、

「もしその金があるならば惜しむべき事ならねども。いかにせんその金はちっとも受けず返したり」と云うに義太吉あざ笑い、

「それは大きな偽りならん。海女が鹽焼く辛き世に三百両と云う金を返し遣わす馬鹿者あらんや。その金無くば紙入れを返す事は我も嫌なり。そを盗人とせられれば、国主の御館へ訴えたまえ。賊が砦の謀反人と交わる者との罪の軽重、明かさ暗さを立てて見せん」と云われて大箱は胸うち騒ぎ、耐えぬ怒りを押し隠し、

「いかばかりに云われるとも▼三百両の金は今は無し。私の家財を売り代なして、金整えて渡すべし。四五日待って紙入れをまず早此方へ返したまえ」と云うに義太吉は頭を振って、

「四五日までなら待ちもせんが、それなれば紙入れを先へは決して返されず。欲しくば金と引き替へに、相談しよう」と口強(くちごわ)（強弁）※に、果てし無ければ大箱は腹ばい伏したる義太吉の懐へ手を差し入れて、取らんとしたる鼻紙袋を義太吉はなにお渡さじとて、両手にしかと抱きしが、いかにかしけん紙入れの内より刺刀が抜け出たり。大箱は是を取り上げて握り持ったる勢いに、義太吉はわざと声を立て、「ヤレ、人殺し」と叫ぶになん。ここに到って大箱は義太吉を殺しても唯やは置かんとする心がついて、しばしもたゆた(たゆた)（躊躇）※わず、刃を逆手に取り直し、思い定めし切つ先を振りひらめかしつ、義太吉の額をひどくつんざいたり。義太吉これにいよいよ騒いで、又、「人殺し」と呼ばれるを呼ばせもあえず大箱は上しかかかって突き掛けるを義太吉は枕辺の三味線取って受け流し。しばしは挑み闘いしが、初太刀の痛手に弱りつつ、胸の辺りをしたたかに、貫かれつつ息絶えけり。

大箱は忙わしく鼻紙袋を引き出して、その密書を行灯の火に押し当てて、これを焼き捨て、
「此の一通はその始め、焼き棄つべしと思ひしかども、味鴨が立ち帰り、状もそのまま焼き捨てられしと云えば小蝶の思わん程も後ろめたしと思案しつ、宿所へ帰って火中にせんとて、鼻紙入れに入れ置きしは我が一生の誤りなりき。今はようやく後ろ安し」と思えば胸を押し鎮め、梯子を下りる折からに、虎魚が二階の物騒がしきをやや聞きつけて起きて来て、思わず二階の半ばにて大箱に突き当たりぬ。その時大箱ちっとも騒がず、故あって義太吉を殺せし由を告げ知らせ、やがて死骸を見せしかば、虎魚は声を振り立てて、「わっ」とばかりに泣き沈む。

※鎖し（とざし）：①門戸をとざす。②門戸をさし固めるもの。錠・掛け金の類。

※文穀（ふみぐら）：読み終えて不用になった手紙。文反古（ふみほうご）。 ※推量（すいりょう）：おしはかること。推測。

※くちごわ（口強）：①強く主張する。強弁する。②馬等の性質が荒い。※たゆた：心が不安で揺れ動き、定まらないでいる。躊躇。

傾城水滸伝 第五編之二 曲亭馬琴著 歌川国安画

その時大箱は虎魚婆にうち向かって、
「云うに云われぬ訳あって、義太吉を手を掛けたれども、今更逃げも隠れもせず、公へ訴えて思

いのままにせよかし」と云うに虎魚は目を拭い、

「もったい無い事宣うな。大恩受けたる我々親子。訳は定かに知らねども、義太吉の不所存にて、あたら命を失いしは宿世の業ではべらんとし思い諦めはべるから、あなたを恨む心は無し。只、悲しきは年寄って、我が身を養う掛け替えの無きをいかがわせん。只これのみが悲しくはべり」と云いつつも又、おせ返れば、大箱これを慰めて、

「我が身につつつが無からんにはそなたの上は心安かれ。今日よりして、一生涯をとにかくもして養うべし」と云うに虎魚は喜んで、

「あなたのお慈悲で一生を飼い殺しにしてたまわれれば、それに増したる幸い無し。しからんには義太吉の死骸を早く取り納めて人に見せぬが肝要なり。棺を求めてたまいな」と云うに大箱頷いて、

「そなたも予ねて知りてぞあらん。鳥辺町の興屋(葬儀屋)※の珍三郎の店に行つて、私の手形を渡せば望みのままに物調わん。一ト筆書いて取らせん」と云うを虎魚は押し止めて、

「書き付け手形のみにては事立ちどころに整い難き。事無しとは云い難し、同じく私と共に彼処へ赴きたまわずや」と頼むを大箱受け引いて、

「云われれば、その理あり。さらば私も行くべし」と云うに虎魚は先に立ち、門の戸を閉ざして背戸口より諸共に立ちいでつつ、鳥辺町へと行く程に、早明け渡る東雲町、一番鳥鳴き渡る町番屋の辺にて、虎魚はたちまち大箱をしかと捕らえて▼動かせず、

「ヤレ、人殺し、人殺し」と声振り立てて叫ぶにぞ、大箱はひどく驚きながら、早く両手を働かし、口塞がんとしたれども虎魚は頭をうち振って、いよいよ高く呼び張りけり。

時にこの町番屋より役人が数多走り出て、やがて間近くおっ取り込めて、その曲者を捕らえんとて、見れば各々見知りたる大箱にてありければ、かつ驚き、かつ疑って、皆々虎魚にうち向かい、「この御書役は人を哀れみ、虫だも殺したまわざる慈悲善根の女中なるに、いかでか人を殺したまわん。そなたは気でも違ひしか。さあ離さずや」と押し止めて、只、大箱を救わんと取り扱えども、ちっとも離さぬ虎魚はしきりに争って、只、がやがやとわめきけり。

かかる所に卯亥蔵はこの朝商いに一早くいでたるが、囚らずここを過ぎるとて、遙かに見れば虎魚婆が大箱を引き捕らえ、町の役人立ち交じり、ひたすら罵り狂うにぞ。卯亥蔵は大箱が義太吉を殺せし事を夢にだも知らざれば、たちまち怒りに耐えずして、荷箱を餅屋のあげ縁に打ち降ろしつつ、腕まくりして走り寄りつつ、声を振り立て、

「閻八婆めが、又しても。昨夜は我らを打擲し、今は又、春雨様をこずき回すは何事ぞ。昨夜の遺恨を忘れはせじ。覚悟をせよ」と罵って、握り拳をひらめかし、虎魚の眉間をはたと打つ。虎魚はこれに驚き怒って、又、卯亥蔵を打たんとて、組みつほぐれつ争う隙に大箱は早逃げ失せて、行方も知らずなりにけり。その時虎魚は卯亥蔵をしかと捕らえて動かせず、

「ナウ人々、此奴めが由無く妨げせし故に人殺しの相手の大箱を逃がしたり。早く此奴を縛めて、事の由を公へ訴えたまえかし」と云うに卯亥蔵は驚いて、

「そは憶えも無き災難なり。我は元より大箱殿が人を殺せし事を知らざるに、相手を逃がせしとて縛められる事があらんや。人々察したまえかし」と声振り絞って叫べども、町役人らは大箱を助げんとのみ思いしかば、その言い訳を聞かずして、卯亥蔵を厳しく縛め、すなわち虎魚諸共に当時、難波の守護なりける天野の判官遠光の問注所へ訴えけり。

これにより遠光は自ら問注所へ立ち出て、訴え人虎魚婆、並びに罪人卯亥蔵を縁の辺に呼び出

させ、自ら訴えを聞きだめるに、虎魚婆がまず申す様、

「私が事は抜け裏店にて浄瑠璃節の指南を致せし義太吉と申す者の母なり。しかるに昨夜義太吉は御館の女中春雨の大箱に殺されたり。事の訳は知らねどもまさしく我が子の仇なれば、斯様斯様に欺いて東雲町まで誘きだし、引き捕らえて町役人に縛めさせんとしたる折、この卯亥蔵が走り来て、私を打擲せしにより、大箱を捕り逃がしぬ。哀れ大箱を尋ね出して、卯亥蔵の罪をも正させたまわれれば有り難からん」とはばかりの気色も無く訴えけり。

その時卯亥蔵が陳ずる様、

「それがしが事は故無く昨夜虎魚に打擲されし遺恨を返さんと思う程に、東雲町にて此の婆が大箱を引き捕らえ、しきりにわめく折に行き会い、昨夜の遺恨を返さん為に虎魚としばし打ち合いぬ。しかれども大箱が義太吉を殺せし事は▼夢にも知らず候いしに。逃がせしななどと強いられて、縛められしは此の身の災難。御賢察下さらば、有り難からん」と陳じけり。

遠光これを聞きながら、心の内に思う様、

「……大箱は心様、世に類い無き賢女にて、人を殺する者にはあらぬに、いかなれば義太吉を殺して逐電せしやらん。由さもあればあれ、卯亥蔵を下手人と相定めて大箱を救わんものを」と腹の内にて思案をしつつ、たちまち声を苛立てて、

「この卯亥蔵めが、白々しき偽りを申すよな。義太吉を殺せしも必ず汝の業なるべし。しばらく牢屋に繋ぎ置き、いとも厳しく責め問えば、遂には実を白状すべし。虎魚は宿所へ退いて、願ひもあれば重ねて申せ。皆退でよ」と退けて、卯亥蔵を牢屋へ遣わし、これより鞭を重くして、卯亥蔵を責めさせれども卯亥蔵は罪に服せず、これにより人殺しの下手人とも定めかねしに、虎魚はその次の日も問注所へ願ひ出て、

「人殺しは大箱なり。哀れ彼の女を絡め捕って恨みを晴らさせたまえかし」と泣き叫びつつ強訴する事、日として間断無かりけり。これのみならず大箱の下役の走り書きの安蛇子さえ、予ねて訳ある義太吉の恨みを返さんと思ひしかば、密に虎魚の腰を押し、様々なる事を訴えさせ、又、遠光も身内人に多く賄賂を贈りなどして、速やかに大箱を絡め捕らせんとぞ図りける。これにより、遠光も今は衆口(噂)※を防ぐ事あたわず、すなわち捕り手の兵を宋公明村へ遣わして、「大箱を絡め捕れ」とて厳しく下知してけるに、組子の人々が立ち帰り、「大箱は早くも逐電して、宿所には人居らず」と云うに遠光は「さもこそ」とて重ねて何の沙汰も無きを虎魚はひどく憤って、密かに安蛇子と談合しつつ、又、訴え申す様、

「大箱が逐電したりとも母と妹は別宅して、年頃同じ村にあり。彼女らを早く召し取って、牢屋に繋ぎたまわれれば、大箱が命を惜しむとも親の為に立ち帰り、縛めに付くことあらん。この儀を願ひ奉る」と泣きつ恨みつ訴えけり。

※興屋(こしや): 葬儀用の興や道具を作り、また貸貸する家。葬儀屋。 ※打擲(ちょうちやく): 人を叩くこと。殴ること。

※衆口(しゅうこう): 多くの人の言葉。多くの人の評判。うわさ。

これにより遠光は止む事を得ず、又、今更に「大箱の母と妹を絡め捕って引き来たれ」とて、組子を宋公明村へ遣わしけり。▼さる程に組子らはその村へ赴いて、遠光の下知を伝え、大箱の母妹を絡め捕らんとしたれども母の妙子は従わず、組子に向かって云いけるは

「大箱は此の年頃不孝者ではべりしかば、御先代に訴え申して、親子親類と義絶せしめ、いか様の災

いありとも係わり合いにならざる由の御証文をたまわりぬ。かかれれば大箱の罪によって、親は更なり、妹でも赤の他人に均しければ召さるべき者にはあらず。是見たまえて先代の証文を見せければ、組子らはその理に服して、彼の証文を写し取り、辺り隣の百姓をのみ引き立て帰り来て、かくと注進してければ、遠光は百姓どもに事の様子を尋ねるに、大箱親子の義絶の事、元より相違無き事なれば百姓どもを返しけり。

安蛇子は此の由聞きながら、いと口惜しく思いしかば、いよいよ虎魚の腰を押して悪知恵をのみかひしかば、虎魚は再び訴え出て、

「大箱親子の義絶の事は予ねて巧みし偽りなるに、よく詮索も遂げさせたまわで、なおざりに成したまえば、遠く都へうち上り、六波羅殿へ訴え申し、御判断を願わん」とて、しきりに強訴してければ、遠光これに迷惑して茫然たる折から、安蛇子は密かに主君をいさめて、

「などてや思い惑いたまえる。大箱は母妙子の宿所に今も隠れて居ると知れる者は申すなり。さるを絡め捕らずして、虎魚が遂に越訴して、六波羅殿へ訴え出れば、御為に良き事あらんや。よくよく賢慮を巡らせたまえ」と忠義めかして囁きけり。

これにより遠光は女武者の教え頭の篠芒の朱良井、直鳶の稲妻を呼び出して、

「汝ら兩人は組子を従え、宋公明村へ赴いて、妙子の宿所を家探しせよ。もし大箱が隠れ居らば、絡め捕らん事もちろんなり。夢々油断すべからず」といとも厳しく下知しけり。さる程に朱良井、稲妻の両勇婦は各々組子を従えて、宋公明村へ赴きつつ、大箱の母妙子に直面して遠光の下知を伝えれば、妙子はやがて先代の証文を取り出して、朱良井、稲妻に見せにけり。その文言の確かなる事、妙子が云う由に違わず、かつ名印にも相違無ければ、二人の勇婦はその一札の文言を写し取り、「親子義絶の事の由は此の証文にて分明なれども世の風聞により疑いあり。ここをもて家探しせよと御下知を受けたれば、気の毒ながら詮索すべし」と云うに妙子はちっとも騒がず、「御下知とあれば、否む由無し。何処まででも探したまえ。まずまず休息したまえ」とて、酒肴をもて厚くもてなし。又、組子にも酒を飲ませて、憂うる気色無かりけり。

しばらくして朱良井は稲妻にうち向かい、

「私はこの所にあつて妙子の刀自を守らんに、御身は奥へ赴いて、よくよく探したまえ」と云うに稲妻頷いて、「しからは私が探すべし」と答えて、やがて座を立て、奥の方へぞ赴きける。

かくて、直鳶の稲妻は納戸、奥の間、米蔵まで、いささか残す隈も無く、天井、簀の子の下までも逐一に探す事およそ一時間▼ばかりにして、元の座敷へ戻り来て、

「私が隈無く尋ねしかども大箱は隠れ居らず」と云うに朱良井は頷いて、

「疑う事にはあらねども今一遍尋ねて見ん。御身はなおここで妙子殿をうち守り、何処へも遣りたまうな」と云いつつ、やがて立ち上がり、奥の方へぞ赴きける。

朱良井は此の年頃大箱と親しき事、姉妹に異ならざれば、案内良く知りたり。この納戸のかた辺に一軒の持仏堂あり、四枚の腰障子を閉てたりける。前にはいと大きな机に打掛けの衣を覆って、香炉、木魚を載せたりける。朱良井はここに立ち寄って、密かに机を取り除けば、上げ板にして下に穴あり。穴の辺に綱が在るのを何心なく引き動かせば、たちまち鈴の音してけり。しばらくして、穴の内より立ちいずる女あり。

これすなわち大箱なり。思わずも朱良井と互いに顔を見合わせて、呆れ果てたるばかりなり。

その時朱良井は声を潜めて、

「春雨の刀自、驚きたまうな。私は御身を救う者なり。虎魚婆が強訴して、六波羅までにも訴えんと申すによって、判官も救う手立てのましまさねば、私と稻妻に下知たまいて、家探しに来るなり。かくまで深く隠れたまえば、今は知る人無しと云えども私は御身に聞いた事あり。我が家には斯様斯様の隠れ所をこしらえたり。万一御身に災いあれば、我が家にかくまわんと云われし事を思い出し、一人密かに隠れ家を尋ねて見れば果たして違わず。もし重ねて余人をもて再び詮索せられれば、隠れ終おせん事難かるべし。かかれば早く逃れ出て、遠くその身を隠したまえ」と云うに大箱胸落ち着いて、

「今に始めぬ情けの程、いつの時に忘るべき。予ねて他郷へ走らんとするものから便宜を得ざれば、心ならずも延引せり。教えに任して、今宵の内にも身の片付きを営むべし」と云うに朱良井領いて、

「その謀り事は極めて良し。何処を宛に立ちいでたまう」と問えば大箱は

「さればとよ、行って頼まんと思ふ所、およそ三か所ばかりあり。その中に佐渡の国の折瀧の節柴は未だ対面せざれども年久しく文通して、客を愛する賢女なり。ここへや行かんと思ふかし」と云えば朱良井領いて、

「いずれへなりとも思い定めて、さあさあ用意をしたまえかし。母御の事は云うも更なり。あちこちを良くこしらえて、虎魚婆の強訴を留め、御身の詮索をおざりになり行く様に計るべし」と云うに大箱喜んで、再会を契りつつ、穴の内へぞ隠れける。

その時朱良井は元の如くに机を直して、座敷へ帰り来にけるが、もし稻妻に疑われる事もやあらんと遠慮して、さらぬ様にて座に直り、

「私もよくよく探しにけれど、実に大箱は在ること無し。かかれば母御と妹御の園喜代を引き連れて、かくと注進申すべし」と云うを稻妻は聞きながら、

「朱良井は大箱とことに親しき者なるに、かく云う事は私の心を疑う故にぞあらんずらん。我も又、この人々を救わんものと思案して、そは云われる事ながら証文が分明なるに母御も又、妹御をも伴うに及ぶべからず」と云うに朱良井は領いて、

「御身だに、しか思いたまえば、ともかくも」と答えつつ、やがてその儀に従いけり。妙子は深く

▼喜んで、

「我が娘の園喜代は近頃湯治に赴いて、只今は家に在らず。これらの由も立ち帰り、申させたまえ」と頼みつつ、又、盃をすすめ、肴をあらため、厚く兩人をもてなして、十両の銀子を贈りしかども兩人これを受けざれば、すなわち組子に与えたり。

○さる程に朱良井、稻妻は難波の館へ帰り参って、妙子の宿所を家探しせし事の趣を聞こえ上げ。大箱は在らざる由をつまびらかに申せしかば、判官遠光は大箱の姿絵を描かせて国々へ触れ知らせ、その行方をぞ尋ねける。されば又、朱良井は虎魚婆に金を取らせて、六波羅へ訴え出るを密かにこれを留めるに、虎魚婆も此の頃は銭無く難儀の折なれば、金を受けて訴えいわず、さて又、難波の重役らは朱良井の贈り物を受けて、折々安蛇子に意見を加え、虎魚の腰を押す事なかれと厳しく諫めて、はじしめければ、安蛇子も今は詮方無く、卯亥蔵も罪を許されて、全て大箱の詮索は只何時となく止みにけり。

そもそもこの大箱は心様が慈悲深く、親に孝行なりければ、春雨の大箱とも又、反哺鳥（孝行鳥）の大箱ともあだ名せられし賢女なるに、いかなればこの年頃、一つ村には在りながら親子住まいを異にして、久離（勤当）※さえ切りたるやらんと疑う人が多かれどもこれには訳ある事にして、全てこの時代には京鎌倉も国々も政治正しからねば、およそ仕えて役人となれる者、させる過ちあらずして罪をこうむる者多し。これにより大箱は女なれどもその親の後を継ぎ勤めに就いて、難波の書役になりし時、その行く末を危ぶんで、いかなる咎を得たりとも親同胞を巻き添えの祟りあらせじと
思うにより、親子密かに談合して、国主遠光の先代に願ひ文を奉り、親子親類義絶の由の証文を請いけるなり。又、家の内に穴を掘り、隠れ家を設け置きしも、凶らず罪をこうむって、逐電するに到れば、その穴倉に身を隠し、当座の追捕を逃れんと、かくは遠慮を巡らせしが、此の度役に立ちたるなり。

さる程に大箱はその夜母と妹らに朱良井の云いつる由を告知らせ、
「かかれば、なお此の所に隠れ居らんはいと危うし。早く他郷へ逃れ去り、この身を全うすべきのみ。年寄りたまいし一人の親に御苦勞▼掛けるのみならず、遠ざかり奉るはいとど悲しくはべれども、身の暇をたまえかし」と云うに妙子は頷いて、
「その儀まことにしかるべし。私の事は懸念せず、早く用意をたまえかし。但し妹園喜代を見送りの為伴いたまえ。例え万里を隔てるとも、遂に大赦の時に会い、立ち帰りたまう日を待つより他はあらずかし」と云うも涙の暇乞い。旅装いを急がして、その暁に立ち出れば、園喜代は髻を切り、男の如くこしらえて、供人にいでたち（扮装）て、風呂敷包みを背に負って、姉の後ろに引き添うたり。

人に知らせぬ門出なれば、只、母の妙子のみ端近く送り出て、果てし嘆きぞいやまさる。心の内こそ哀れなれ。

※久離（きゅうり）：連帯責任を免れるため親族関係を断絶すること。欠け落ち久離。→勤当

○されば又、大箱は予ねてより佐渡の国の折瀧の節柴を頼まばやと思ひしかば、早く難波を逃れ出て、近江路より北の方、越路を指して急ぐ程に、時は神無月の初めにて小春の空と人は云う、世は暖かき頃ながら北国は早雪降って、いとど寒けき草枕、幾夜か旅寝を重ねつつ、越後の寺泊より佐渡の国へおし渡り、節柴の宿所へ赴いて、かくと案内する程に、取次ぎの者が出迎えて、「何処より」と尋ねるに大箱答えて、

「我々は難波より遙々来ぬる大箱と云う者なり。主人の君に申したまえ」と名乗りをすれば、その人聞いて頭を傾け、と見かう見て、「大箱殿と宣うは春雨の大箱殿か」と問うに大箱微笑んで、「その春雨の大箱は私の事ではべるかし」と云うにその人ひざまづき、

「さては左様に候いしか。我が主君の節柴殿が日頃御身の噂して対面を願ひたまいにき。しかれども折の悪くて、昨日別荘へ赴きたまいつ。今日も彼処に逗留なり。それがし案内仕らん。いざいざ」と先に立って、本宅を立ちいでつつ、行く事既に数多にして、彼の別荘に来にければ、案内人は大箱姉妹を玄関に待たせ置き、主人にかくと告げにければ、節柴は慌ただしく、端近く出迎えて、「此は思いがけも無き。よくこそ訪わせたまうものかな。まず此方へ」と案内をしつつ、奥座敷へ伴って茶をすすめ菓子すすめ、さて云う様、

「年頃文通のみにして、御勤めの暇無ければ、対面は叶い難しと聞こえさせたまいに、かく暇を

得て、遙々と訪われる事こそ本望なれ。但し故ある事にや」と問われて大箱は声を潜め、
「私が遙々来る事は深き訳ある事なりかし。その故は斯様斯様」と義太吉を殺したる事の趣を告げ知らせ、辛く難波を逃れ出て、浮世を忍ぶ隠れ家に頼まん為に来る由をしかじかと説き示して、妹園喜代を引き会わせれば節柴ははばかりる気色も無く、

「さばかりの事、何かあらん。よしや勢いある人々を害したまう事ありとても、私は匿い参らせんに、六波羅よりも鎌倉よりも詮索せられる事にはあらず。只落ち着いていついつまでもここに逗留したまえ」とて、ひたすら大箱姉妹を上座に押し上げ、やがて酒宴の席を開いて、大方ならずもてなす程に、その日も既に暮れにけり。

かかりし程に大箱は手水に立ちまくしたりしかば、節柴はすなわち一人の腰元に手燭を取らして、縁側伝いに案内をさせけり。これにより大箱は手水場に赴いて、立ち帰らんとする程に、廊下に沿った小部屋あり。ここに一人の女が居て、近頃瘧疾(熱病)※を▼病み患うに、火鉢の火すら当たりけしけん。今取り寄せたるにやとおぼしき堅炭の火を柄の長き十能に入れたるを未だ火鉢へ移さであり、大箱は忙わしく、その辺を過ぎるとて、思わずその柄を踏みしかば、十能たちまち跳ね上がり、堅炭の火も諸共に、その女の顔の辺りへ跳ね掛からんとしてければ、女は「あなや」と驚いて、呆然としたりしが、これにて瘧疾は落ちにけり。その時女はひどく怒って、

「この痴れ者らが何事ぞ。かばかり広き廊下を過ぎるに、故意と十能の柄を踏んで、我らに火傷をさせんとするは遺恨あつての事なるべし。その訳聞かん」と息巻いて立ち上がらんとしたりしを腰元急に押し止めて、

「お腹立ちは道理なれども、此は第一の客人にて、まだ案内を知りたまわねば、この十能の長き柄が廊下の方へいでたるを踏みたまひしは過ちなり。許させたまえ」と詫びるを聞かぬその女はあざ笑い、

「我儕がここへ来る頃も、第一の上客なりとて主従ひとしくもてなせしが、近頃は疎み果ててや、かく患えども薬も与えず。そはとまれかくもあれ、あくまでに侮られては我がこの拳が堪忍せず。覚悟をせよ」と罵りながら十能の柄をかい取り早く既に打たんとしてければ、腰元は慌てふためいて、大箱と諸共に侘びつつ悶着したりけり。かかる所に節柴は廊下の辺に事ありと、知らせに自ら走り来て、その女を押し鎮め、

「此は騒がしや。この客人は人に知られし御書役なるに無礼なせそ」と制すれば、女はいよいよあざ笑い、

「女の書役、右筆は今国々に数多あり。その中に只一人、津の国の天野の書役に春雨の大箱と呼ばれる者は賢女なり。それより他に慕わしき書役は絶えて無き者を」と云うに節柴はうち笑んで、

「しからばそなた、大箱殿を見知って居るか、いかにぞや」と問えば女は頭を振って、

「我、大箱を知らねども世の風聞に伝え聞くに、人を救うに慈悲深く、かつ孝にして仁義に富める賢女なる由、人皆云えり。その大箱に会うならば、我れ再拝して従わん。その余の書役に恐れんや」と云うに節柴はいよいよ笑って、

「汝知らずや、この客人こそ、彼の春雨の大箱殿なれ。斯様斯様の事により、我が身を頼って来たまいぬ」と告げれば、又、大箱も「私すなわち大箱なり。無礼を許したまえかし」と云うに女は驚いて、身を起こしつつ、大箱を忙わしく伏し拝み、

「私は眼ありながら、さる賢女とは知らずして、ひどく過言を申したり。許させたまえ」とうち詫

びれば、大箱急に助け起こして、元の所に押し直し、

「私^{わらわ}はつらつら御身^{おんみ}を見るに、世の常の婦人にあらず。苦しからずば、名乗りたまえ」と云われて、女はちっとも疑義せず、

「私^{わらわ}は元上野^{こうずけ}の国の松枝^{まつえだ}の者にして、名を竹世^{たけよ}と呼ばれたり。いと早くより武芸を好んで男に優る力あれば、世を我がままに送りしに、去年の頃、我が里^{こぞ}に掠鳥^{かすりどり}と云う悪たれ女あり。所の害になる者なれば、私^{わらわ}一時の怒りに任して、ある日そ奴^{ひとこぶし}をうち倒せしに、一拳にして息絶えたり。よってすぐさま逐電^{ちくでん}して、この所へ逃^{のが}れ来て、一歳ばかり送る程に、近頃人の噂に聞けば、その時^{あた}辺りの輩^{ともがら}が掠鳥^{かすりどり}を介抱^{かいほう}せしに、ようやくに黄泉路返^{よみじ}って、つつが無き事を得たり。よって▼私^{わらわ}に崇^{たた}り無しと、定かに聞いたる事あれば、いかで故郷へ立ち帰り、姉を訪^とわんと思うものから、思^{おこり}わず瘡疾^やを病^やみ患^{わづら}って、発足^{はっそく}を延引^{えんいん}せり。しかるに御身^{おんみ}の過^{あやま}ちにて、遂に瘡疾^{おこり}が落ちし事、これゆくり無き幸^思いな^{いがけない}なり。願^{えん}うはこれを縁^{えん}にして教^たえたま^じえ」と他事^{ともえ}も無き、物の云い様爽やかにて、身の丈は六尺ばかり。見^か苦し^{おぼ}からぬ顔容^{かおばせ}は木曾義仲^{きよなか}の思^{おも}い者^{ともえ}、巴^とと云うとも憎^{にく}からずとて、しばし見惚^{まど}れし大箱は斜^なめならず喜^{よろこ}んで、

「さてはその名を予^とねて聞^きく、竹世^{たけよ}の刀自^{たて}でありしよな。いざ諸共^{いっこんく}に一献酌^{けんたく}まん。此方^{こなた}へ来ませ」と手を取^とって、奥座敷^{おくざ}へ誘^{いざな}うにぞ。節柴^{ふししば}もまた喜^{よろこ}んで、銚子^{さかな}を替^かえ肴^{あたら}を更^{あらた}め、いよいよ厚くもてなしけり。ここに到^{いた}って大箱は園喜代^{そのきよ}に由^ゆを告^つげ、やがて竹世^{たけよ}に引き会^あわせ、且つ大箱は更^{さら}に、又、竹世^{たけよ}を妹分^{いもうと}にして姉妹^{あな}の義^ぎを結^{むす}び、眠^ふる時^{とき}も臥^ふす時^{とき}も臥^ふ所^{ところ}を共^{とも}にするまでに、いと睦^{むつ}まじく語^{かた}らひければ、竹世^{たけよ}は遂^{ついに}に大箱^{おほひら}の徳^{とく}に恥^はて、行^いいを改^{あら}め慎^{しん}み、いと大人^{おとな}しくなりしかば、節柴^{ふししば}もこれを喜^{よろこ}び、奴婢^{ぬひ}らも不思議^{ふしぎ}に思^{おも}いけり。

そもそも竹世^{たけよ}が近頃^{ふししばしゆじゅう}、節柴^{ふししば}主^{しゆ}従^{じゆう}に疎^{うと}まれしは彼女^{たんにょ}が短慮^{ののし}にて人^{ひと}を罵^{のの}り、ややもすれば打ち懲^こらす、我がままようやく募^つりしかば、奴婢^{ぬひ}らは恨^{うら}み憤^{いきどお}り、主^{しゆ}の節柴^{ふししば}に告^つげるにより、節柴^{ふししば}もまた喜^{よろこ}ばず、いつしか竹世^{たけよ}を疎^{うと}お程^{ほど}に、もてなし始め^{はじめ}の如^{ごと}くならず、しかるに竹世^{たけよ}は大箱^{おほひら}に親^あしみしより身を慎^{しん}んで、短慮^{たんにょ}の振^ふる舞^{まい}いをせざりしかば、節柴^{ふししば}もまた彼女^{たんにょ}を愛^{あい}する事、大箱^{おほひら}、園喜代^{そのきよ}に異^{こと}ならず。或^{ある}いは新^{あらた}しき着^きる物^{もの}を仕立^{つか}てて遣^{よろず}わし、萬^{よろず}に不自由^{ふじゆう}無^なき様に始め^{はじめ}の如^{ごと}くもてなしけり。

※瘡疾(おこり):一定周期で発熱し、悪寒やふるえのおこる病氣。マラリア性の熱病の昔の名称。私(わらわ)やみ。おこりやみ。[季]夏。

○かくてその年も暮^あれ、新玉^{あらたま}の春立^{はるた}ち帰^かり、世は暖^ぬかになりしかば、竹世^{たけよ}はいかで故郷^{こきやう}へ帰^かって姉を訪^とはんとする心^{こころ}をしかじかと、節柴^{ふししば}、大箱^{おほひら}らに告^つげしかば、人々^{ひとびと}いとど名残^{なごり}を惜^{おぼ}しんで、一日一日留^{とど}めるものから、さてあるべきにあらざれば節柴^{ふししば}は竹世^{たけよ}の為^{ため}に旅装^{りよう}いを調達^{あまた}して、路用^{ろよう}を数多^{あまた}取^とらせるに、大箱^{おほひら}もまた十両^{じゅうりやう}の金^{かね}を餞別^{はなむけ}に贈^{たま}りけり。かくて竹世^{たけよ}はその暁^{あかつき}に人々^{ひとびと}に別^{わか}れを告^つげて、港^{みなと}より船^{ふね}に乗り、越後^{しなの}の国^{くに}へ押^おし渡^{わた}り、信濃^{しんのう}路^ぢより上野^{こうずけ}の松枝^{まつえだ}へとて急^{いそ}ぐ程^{ほど}に、長^{なが}き旅寝^{たびね}に日頃^{ひごと}経^へて、碓氷^{うすい}峠^{とうげ}の此方^{こなた}の輕井^{かるいざわ}沢^{ざわ}を過^よぎる時^{とき}、宿^{しゆく}外^{はず}れに酒^{さけ}屋^やあり、門^{かど}には高^{たか}く幟^{のぼり}を出^いし、「三碗^{さんわん}にて峰^{たかね}を越^こえる事^{こと}を許^{ゆる}さず(不許^{ふしよ}三碗^{さんわん}越^こ峰^{たかね})」と云^いう六ヶ^{むつ}字^じを印^{いん}したり。物欲^{ぶつよく}しくなりし頃^{ころ}なれば、竹世^{たけよ}は内^{うち}に進^{すす}み入^いり、床机^{しょうぎ}に尻^{しり}をうち掛^かけて、「酒^{さけ}をい^いだせ」と急^{いそ}がすにぞ、主人^{あるじ}と見^みえたる一人^{ひとり}の翁^{おきな}が忙^{いそ}がわしく出^い迎^{むか}えて、

「女中^{じょちゆう}は酒^{さけ}を召^まされるよな。肴^{さかな}は鳥^{とり}の鍋焼^{なべやき}きと湯豆腐^{たうとうふ}のみに候^{まう}」と云^いうを竹世^{たけよ}は聞^ききながら、「それはいづれもしかるべし。酒^{さけ}諸共^{いっこんく}に早^{はや}いだせ」と云^いうに主人^{あるじ}は心得^{こころえ}で、酒^{さけ}に肴^{さかな}を取り添^そえて、

早持て出てすすめけり。その時竹世は一トちろりの酒残り無く飲み尽くして、なお又、飲まんと催促するを主人は聞かず頭をうち振り、

「女中は門に出したる幟を何と見たまいたる。我が家にて造れる酒はその味わい濃くして、人を酔わせる事、世の常に過ぎたり。ここをもて、三碗にして峰を越える事を許さずと印せしなり。例えばいかなる上戸なりとも三碗より上を過ぎす時はたちまちに酔い倒れて、峰を越える事叶い難し。女中も既に三碗の酒を飲みたまひしかば、その余を売らず候」と云わせもあえずあざ笑い、

「人はともあれ我はなお、百碗も飲まんと欲す。さあさあいだせ」と苛立つにぞ、主人は遂に争いかねて、又、三碗を与えるに、これにてもなお足らずとて、およそ飲むと飲む程に、十四五碗に及びしかば、竹世はようやく飽き足りて、酒の値を主人に取らせ、早忙わしく出て行くを主人は追っかけ呼び留めて、

「碓氷峠を越えんとならば、今宵は我らの宿所に泊り、明日道連れを待ち合わせ、真昼の頃に越えたまえ」と云うを竹世は聞きながら、

「そは何故に止めるぞ」となじれば主人はまめだちて、

「さては未だ知りたまぬな。近頃その山に虎が棲んで、人を害すること限り無し。これにより、国主より触れられて、巳の時より未まで、三刻の間、二三十人の道連れを得て越えよとなり。今は申の下がりなるに、いかでか一人で越えらるべき。さあさあ帰りたまえかし」と云うを竹世はあざ笑い、

「昔よりして、日本に虎の棲む山あるを聞かず。我はつやつや信じ難し」と云われて主人は眼を見張り、

「昔、後白河の院の御時、朝鮮国より一匹の虎の子を貢ぎ奉りしかば、当郡の領主の遠近十郎兼道主へ預けて飼わせたまいけり。かくてその虎、年を経て、いと大きくなるままに、檻に養うこと叶わず。これにより前裁にしし垣※を結い廻して、▼放し飼いにせられしに、既に牡牛に等しくなつて、人を食らわんとするい勢いあれば、食を止めて干し殺せとて物を与えずなりしかば、虎はしきりに怒り狂って、しし垣を躍り越え、行方も知れずなりにけり。これよりして後、その虎は碓氷峠に隠れ棲み、しばしば人を害せしかば、遠近殿より四五十人の狩り人に命ぜられて、狩り捕らせんとしたまえども手に合うものでは候わず。この国に無き虎が此の国にある因縁来歴、これ実説に候」と告げれば竹世はますます笑つて、

「よしや実説なればとて、我は何とも思わぬなり。事を巧みに旅人を脅して止めんと欲するか」と云うに主人はうち腹立てて、

「私は御身の為にとて、真を告げるを悪く聞かれて、しか云われるこそ本意なけれ。しからは勝手にしたまえ」と云い放ちてぞ立ち戻る。

かくて竹世は足に任して碓氷峠を越えんとするに、幾程も無く日は暮れて、酒の酔いが上りしかば、足元いとど定かならず、一步は高く一步は低く、只よろよろひょろひょろと、よろめきながらたどり行く、山路深く分け入れば、道の辺の木を押し削り、又、旅人を戒める文書をここにも書きたりけり。これも又、酒屋の主人の謀り事なるべしとなお登り行く程に、山の神の祠の軒端に札を掛けて同じ文言を記せしが、ここには領主の名印あり。さては真でありけるなり。ここより取って返さんと思うものから、酒屋の主人に笑われん事の口惜しく、遂に又辛くして峠までよじ上れば、酒の酔い益々発して、足の運びも定かならねば、いと平らかなる石の上に旅包みをうち下ろし、その身もそこにうち臥して、しばしまどろまんとする折こそあれ、山風颯と落とし来て、現れいで

たる一つの大虎。竹世目掛けて飛びかかるを心得たりと荷に付けたる棒かい取って立ち向かい、かけ隔てて、幾度となく掛け悩ませば、虎はようやく勢い衰え、互いに隙をうかがいたる。竹世が苛って打つ棒を虎も目早く身をおかわせば、松の株に打ち当てて、棒は発止と折れたりける。竹世はすかさず大手を広げて、ひらりと虎に飛び掛かり、左右の耳をしっかと押さえ、頭を大地へ押し付け押し付け、少しも緩めざりければ、虎はしきりにもがき狂って、前足をもて地を搔く程に、たちまち穴の出来しかば、竹世は虎の鼻づらを穴の内へと押し入れて、肋をはたと蹴りければ、虎は一声ひどく叫んで、弱るを得たりと左の手をもて、虎の頭を押し進め、右の拳をひらめかし、虎の眉間を幾つともなく続け様に打ちしかば、虎は眉間を打ち砕かれて、血反吐を吐いて死んでけり。

※し垣：害獣の進入を防ぐ目的で山と農地との間に石や土などで築いた垣のこと。

傾城水滸伝 第五編之三 曲亭馬琴著 歌川国安画

さしにも猛き大虎も勇婦の拳に脳骨砕け、血反吐を吐いて死にければ、竹世は「さこそ」と立ち上がり、折れたる棒を拾い取り、なお生き返ることもやとて、再びひどく打ちしかば、又、生くべうもあらざりけり。

いでや此の虎を麓の酒屋へ引きもて行って、主人に見せんと思いつつ、抱き起こさんとしたれども動くべくもあらざれば、そのままに捨て置いて松枝の方へ急ぎけり。されど竹世の力にて、その虎を引きもて行く事はあたわざるにあらざれども、この時ひどく疲れしかば、強いては力を用いぬなるべし。かくて竹世は峠を下りて、東を指して行く程に、一群繁き尾花の内より二三匹の虎が現れ出たり。竹世は遙かにこれを見て、驚くこと大方ならず、

「我は既に一つの虎を殺してひどく疲れたるに、今又、数多の虎に出会って、いかでか勝ちを取る由あらん。かくと知らば、この山を越えざるべきに」と後悔して、しばらくそこにたたずお程に、怪しむべし、その虎は人の如くに身を起こして、此方を指して来にけるを見れば真の虎にはあらず、狩り人ら五六人が黄の木綿に虎絵を描きし縫いぐるみの着物を着て、頭には作り物の虎の頭を戴きつ、手には弓や竹槍などの得物(武器)、得物を持てるなり。

その時狩り人は竹世を見つつ大きに驚き、

「さても御身はいかにして、つつがなく峠を越えたる。虎には会わずや喰われずや」と問うに竹世は微笑んで、

「我もその虎に会いぬ。和殿らはまた何者ぞ」と問い返されて皆云う様、

「我々は狩り人なり。遠近殿の仰せによって、仲間の狩り人四五十人で彼の虎を狩り取らんとて、かくの如くにいでたち(扮装)で山籠もりして狙えども、峠までは行くこと叶わず。よってここらで下待ちして虎の来るのをうかがうのみ」と云うに竹世は頷いて、

「その虎は先の程、既に私がうち殺しぬ。疑わしくば行って見よ」と告げるに、狩り人は疑い迷って、皆真とはせざれども、もしやと思えば竹世と共に峠の方に登って見るに、果たして虎はうち殺されて血反吐を吐いて倒れてあり。

その時竹世は虎を殺せし事の趣を斯様斯様と始め終わりを物語れば、狩り人らは舌を震って、

或いは恐れ、或いは呆れて、且つ喜ぶ事大方ならず、各々等しく膝まづいて、
「かくまで猛き獣をうち殺したまいしはこれ人間の業ならず。昔の巴、板額なりともいかでか是
に及ぶべき。思い掛け無き助けによって、所の害を除かれしは願うて得難き恵みなり。さあ村長へ
告げ知らせよ」とて一兩人を走らしつつ、狩り人数多が集い来て、死したる虎を藤蔓で幾重ともな
く縛りからげて、二三十人でこれをかき上げ、遂に竹世を誘って又、軽井沢の方へ赴く程に、遠近
の里人らは早くも由を伝え聞き、天に喜び地に喜び、すなわち竹世を迎えの為に乗り物を持って群が
り来つ。

道より竹世をかき乗せて、ざんざめかして(騒いで)村長の宿所を指して行く程に、これを見んと
て老若男女が東西に走り違い、巷に集い、門に立って見る者あたかも市の如し。さる程に村長は
竹世を厚くもてなして、その明けの朝に当郡の領主なりける遠近の冠者の太郎忠道の館に赴き、事
しかじかと訴えければ、忠道の喜び斜めならず、
「うち殺したる虎諸共に竹世とやらんを召し連れ来よ」とて対面の用意あり。しばらくして村長は
二三十人の狩り人らに死したる虎をかき担わせ、竹世を伴い来にければ、忠道すなわち問注所に立
ち出て、その虎を実見あり。

竹世を招き近づけて、勇力を誉め功を賞して、さて云う様、
「我が父の遠近十郎兼道主が世に在りし頃、朝鮮国より貢ぎし虎を古院が預けさせたまいにき。し
かるに古院は失せたまいて、我が父もまた世を去りぬ。今は御用も無きものながら、さすがに殺す
事も得ならず、持て余したりけるが、虎係の者どもが誤って逃がせしより、碓氷の山に隠れ棲み、
▼人を害する事はなはだし。この事、上の御沙汰に及べば我が身も安穩なるべからずと、思えば安
き心も無く、狩り人らに云い付けて、白銀五十枚を褒美と定め、その虎を狩り捕らせんとて、種々に
心を尽くせしかども良くする者の無かりしに、男も及ばぬ功し(功績)※はそもそもいかなる勇力ぞ
や。千々の宝を贈るともあき足るにしもあらざれど、始めよりの定めなれば、白銀五十枚違わすな
り。尚もこの地に逗留して、疲れを休らえ候へ」といふ懇ろに説き示しつつ、白木の台に載せたり
ける褒美の銀子をたまいにければ、竹世はしばし額突いて、

「図らず虎を殺せし事、殿の武徳によれるのみ。いかでか私の功ならんや。故郷は上野の松枝にて、
ここより道が遠からねば路用などにも事欠かず、ほのかに伝え聞きはべるに、五十人の狩り人らは
その虎を狩り捕らんとて、物多く費やせしと云うは真にさもありません。願うはこの御金を狩り人ら
に取らせたまえば、さこそ喜びはべるべし」と云うを忠道は聞きながら、「その儀はともかくも汝汝
の心に任すべし」と即座に許容せられしかば、竹世はすなわち褒美の金を皆狩り人らに取らせにけ
れば、誰か喜び勇まざらん。いよいよ竹世を徳として、産神の如く敬いけり。かくて又、忠道は竹
世をなおよくもてなせとて、その日は旅宿に退かせ、つくづくと思ひ見るに、

「竹世は力が男に勝って武芸に長けたるのみならず、褒美の金を取らずして、狩り人らに与えしは
その心様いと賢し。今の世は都にも又、国々にも武芸に優れし女武者を置かれしかども、信濃は
辺土(辺地)の事なれば、ここらにはさる者無し。いかで竹世を留め置いて、女武者の教え頭になせ
ばや」と思案しつ、次の日竹世を呼び寄せて、事しかじかと説き示し、「まげて我らに任せよ」とて、
懇望懇ろなりければ、竹世は辞するに言葉無く、遂にその意に任せしかば、忠道は深く喜んで、衣
一ト重ねを引出物として、その余の物も乏しからず、月毎に当て行われて、男女両三人を付け置い
て、炊事の業を司らせ、重用大方ならざれば、竹世も主の恩義を感じて、心を尽くして務めけり。

とかくする程にはや春も如月の末に至って、世は花盛りになりしかば、竹世はつらつら思う様、
「我れは只、故郷の姉を訪わんと思ひしに、遠近殿に引き留められて志を得果さず。さばれ故郷は
碓氷の山を隔てたるのみなれば、勤めに暇あらん時、松枝へ赴くべし。この地に足を留めてもま
だいづ方へもいでて見ず、▼今日はことさら麗らかなるに城下なりとも見物せん」とて供人一人を
従えて、遠近の里の方へ漫ろ歩きをする程に、たちまち後ろに人あって、
「我が妹はなどてかく姉をば疎み果てたるぞや」と恨み顔にて呼び掛けるを驚きながら見返れば、是
すなわち別人ならず竹世の姉の冢代なり。思い掛け無き事なれば、「此は此はいかに」とばかりに走
り近づき、一つに集って、そのつつが無きを祝すれば冢代もまた喜んで、
「近頃、世の風聞に碓氷の虎をうち殺せし勇婦竹世と云う者あり。元旅人でありしかど遠近殿に押
し留められ、女武者の教え頭に成されたりと定かに聞きぬ。そは必ず御身ならんと思ひにけれど、
世渡りの暇無ければ、尋ねも得せねど、我が推量に違わざりき。さてまず何より告ぐべきやらん。
私は御身に別れてより、一度は御身を恨み又、一度は懐かしく思いしぞや」と云い掛けて、ひたす
ら嘆息したりしかば、竹世は事の心を得ず、まずその故を尋ねれば冢代は答えて、
「さればとよ、御身が掠鳥をうち倒して、故郷を逐電したる時、ひどく私は崇られて数多の金を
費やしたり。その後、所のおぶれ者らが、ややともすれば私をなぶって、商いにすらいでかねたり。
もし御身が居るならば、かくはあらじと思うにより、いとど懐かしかりしなり。御身も予ねて知る
如く、私は姿の見良からねば、一生男を持つまじけれと思ひ定めし事なれば、親の時より老舗たる
餅を日毎に売り歩き、ともかくも世を渡りしに、斯様斯様の事により、金蓮助と云う閑坊人を去年の
秋に呼び迎えしに、彼の人は異色にて衣の仕立てを技とすなれど、女めきたる優容なれば世渡りに
はいと疎かり。よって私は今もなお商いにいづるぞかし。しかるに金蓮助を閑坊人にしたる頃、所
の若き者どもが来つたなぶって口やかましく、耐えられぬ事が多ければ、去年の春、松枝よりこの
地へ移り住みたるなり。なお種々の話もあれど、途中にては尽くし難かり。いざたまえ宿所にて、
金蓮助殿にも引き会わせん。いざさあさあ」と先に立ち、やがて家路に伴いけり。

※さんざめく：「さざめく」の転）大勢でにぎやかに騒ぐ。 ※功し（いさおし）：①勇ましい。雄々しい。②勤勉だ。③手柄がある。

※辺土（へんど）：①都から遠く離れた土地。辺地。②都の近辺。

さてもこの冢代は背低く色黒く人並外れた不器量にはあれども、その心様は愚直にて竹世には絶
えて似ず、松枝に在りし時は女世帯で餅を商い、ともかくも世を渡りしかば、人あだ名して一寸星の
冢代と呼びなしたり。しかるに松枝に万両後家と呼ばれたると豊かなる寡婦あり。彼女は財あ
るに任せて、男妾など云う者を五七人も養い置きしに、金蓮助と云う若人は万両後家の庭子※にて、
所に稀なる美男なれば、彼を男妾にせんとて、その心を示せしに、金蓮助は予ねてより腰元の何某
と密通してありしかば、主の後家をひどく嫌って、事にかこつけ否むにより、後家は深く憤り、
「しからんには金蓮助めに世の中に類い稀なる醜き女を妻に持たして思い知らせん」と息巻きつつ、
その相方を選びしに、ある人が冢代を薦めるにぞ、▼「そは究竟」と喜んで、仲立ちをもてしかじ
かと冢代に云わして金蓮助を入婿にせんと図るに、冢代は女世帯にて、生涯男を持たじと云う、
「しからば閑坊人にして、ともかくも引き取るべし。金蓮助もしこの後に亭主ぶりで我がままを働
くか、或いは女狂いを致せば、この方へ告げ知らせよ。きっとその儀を正すべし。かかれば亭主に
して、亭主に非ず。この儀をもって縁談を取り組みたまえ」と云わせるに、冢代もその万両後家に

は五六両の元手の借りあり。しか云われるを否まん事も後ろめたき由あれば、ようやくに請け引いて、さて金蓮助を迎え取りぬ。

かかりけれども金蓮助は元より庭子の事なれば、主の云い付けに背くこと得ならず、関坊人の定めにて、冢代の宿所へ引き移りしを所の若者が嘲り笑って、礫を打ち掛けなどせしかば、冢代は遂に松枝の住まいをいぶせく思い詫び、金蓮助と共に遠近の里へ移りしなり。しかるに金蓮助の母親は元針妙でありしかば、金蓮助もこれを見習って、衣を仕立てる事などを人並にするをもて、冢代の関坊人となりしより仕立て屋をもて生業にしたれども元より怠け者なれば、はかばかしき仕事もあらず、己は宿に籠もり居て、冢代に餅を売り歩かせ、おめおめと養われれば、関坊人は名のみにて、掛人(居候)※に異ならずと人皆あざ笑いけり。

※庭子(にわこ)：近世の隷属農民の一種。 ※掛人(かかりゆうど)：他人に世話をしてもらっている人。居候(いそうろう)。

○さる程に冢代は囚らず巡り会った妹竹世を伴って、己が宿所へ帰りつつ、妹を金蓮助に引き合らし、大方ならずもてなすに、金蓮助もまた喜んで、その身は竹世とうち向かい、馴れ馴れしげに慰めて、酒を買い肴を買うにも冢代をのみ走らせて、下女の如くに使えども冢代は萬心良しにて、いささかも争わず、果ては三人団欒して盃の数も巡りし時、竹世は佐渡の節柴の宿所に一歳ありし事、この地に来つつ虎を殺せし、その事の始めより遠近殿に留められて、彼の家に仕える事まで、つまびらかに告げ知らせれば、金蓮助はしきりに感心して、

「妹御は遠近殿に召し使われたまうならば、長屋なども賜って不自由は無かるべし」と云うに竹世は頭を振って、

「否、未ださる事は無し。御館の内にて、ささやかなる休息所に住まいせり」と云うに金蓮助はまめだちて、

「しからんには上に願って姉御と同居したまえかし」とすすめるは胸の内に目論みありとは夢にも知らぬ冢代はしきりに頷いて、

「実に、我が妹が一つに居れば、人が侮る事も無く、後ろ安く月日を送らん。さあさあその儀を計らいたまえ」と云うに竹世は否むに由無く、

「しからは主君に願い申して、明日明後日の頃移りはべらん。今日は日も早傾きぬ。此のまま別れはべらん」とて、暇乞いして忙わしく、御館を指して帰りけり。

○金蓮助、これを見送って、腹の内に思う様、

「……一つ腹より生まれても雪と炭なる姉と妹。竹世は面影凜として、大女にはあなれども十二分の器量なり。いかなる宿世の悪業やらん。豚に等しき冢代を抱いて、臭きを忍ぶ例えの節、牛に馬を乗り換えて、竹世と夫婦になるならば、この煩惱はあるまじきに。彼女がここへ同居せば、手立てをもって本意を遂げん」と胸巧みして待つ程に、その次の日の夕暮れに竹世は小者兩人に衣装、夜具、葛籠、化粧道具を持ち運ばせ、姉の宿所に移り来て、明ければ早く御館へ参って、▼形の如くに勤めけり。これにより金蓮助は東表てに三畳敷きの小座敷あるをかきはらい、竹世の部屋と定めつつ、いづる時も送り迎えをするまでに、いとまめやかにもてなすにぞ、竹世はこれを喜ばず、いと胸苦しく思うのみ。六七日を過ぎす程に、春の寒きの冴え返り、淡雪深く降りけれど、冢代は餅を売りに出て、その夕暮れまで未だ帰らず。金蓮助は今日こそは彼の人を口説き落として本意を

遂げんと、予ねてより酒肴を調べて、今や竹世が御館より退き帰るか待つ程に、ようやく未の頃に至って、竹世が帰り来にければ、金蓮助は忙わしく、湯を盥に汲み入れて、まず早その足をすすがせて、

「春の寒さは耐え難きに雪さえ降れば道の程もさこそ難儀にありつらめ。囲炉裏に寄って当たりたまえ」と云いつつ酒の爛をして、ひたすら竹世にすすめれど、竹世は姉御の帰るを待って、共に飲まんとなみしを金蓮助は聞かずして手酌に注いで一碗傾け、やがて竹世に差しけるにぞ、竹世は辞するに由無くて、半ば受けて飲み干しつつ、又、金蓮助に返しにければ、金蓮助は並々と再び注いで、半ば飲み竹世の膝へ手を掛けて、

「始めの爛はいと温るかり。これこそ良けれ飲みたまえ」と云いつつ口へ差し付けて、抱き寄せんとしたりしかば、竹世は怒りに耐えずして、その盃を囲炉裏の中に払らい落とし、金蓮助を退けざまに突き退けて、眼を怒らし声を振り立て、

「此は何事ぞ。酔い狂ってや。淫りかはしき振る舞いは鳥獣にも異ならぬ。痴れ者には云い甲斐無けれど、この頃より舌たるき言葉の端と目使いをいと胸悪く思いに、さては人を見違えしか。重ねてもさる手をいませば、その度は許し難し。慎みたまえ」と罵り恥ずかしめて、己が部屋にぞ入りにける。

折から冢代は帰り来て、金蓮助の面持ちの常ならぬをいぶかりつつ、その故を尋ねるに、金蓮助は齒を食いしばり、

「よしや御身の妹でも畜生に劣る彼奴が淫乱。御身の留守を幸いに、我らにもたれかかりしを恥ずかしめたりければ、うち腹立てて部屋に入りぬ。かくあるべしとは知らずして、同居をすすめし口惜しさよ」と己が悪事を塗りつけてもなおはげ易き壁訴訟※、只くどくと呟きけり。その時冢代は笑いつつ、

「竹世は我が妹ながら、武勇に優れしのみならず、心正しき者なるにいかでかざる正無事(悪戯)をしはべらん。それには必ず訳ありなん。私行って尋ねん」とて、彼女の部屋に赴きしに、竹世は手を組み、頭を垂れて、暗き処に一人居り。呼び立てれども答えは得せで、思いかねてや身を起こしつつ、雪をおかして御館の方へ只一散に馳せ去りけり。

※壁訴訟(かべそしょう): ①訴えかける相手もないのに、不平をつぶやく。また、陰で苦情を言う。②聞こえよがしに言う。

金蓮介はこれを見て、からからと笑いつつ、

「彼奴は我らに恥しめられて、耐え難くや思いけん。日の暮れるに出て行きぬ。只うち捨てて置きたまえ」とて、さも憎さげに嘲りぬ。かくてその宵の間に竹世は下部兩人を御館より従え来て、日頃姉の宿所に置きたる衣類調度の葛籠まで、こと如くこれを背負わせ、冢代が訳を尋ねるに一言も答えをせで、再び御館へ移り住みぬ。

これよりして日数経るまで、竹世は姉を訪れず、冢代もまた彼女を訪わず、只金蓮助のみ腹立ちの遣る瀬無ければ、ややもすれば冢代をひどく罵り使って、機嫌良き日は無けれども、冢代はちっとも争わず、日毎に彼の機嫌を取って、朝には巷に出て餅を売り、夕べには宿所に帰って、明日の仕込みに夜を更かしつつ、いと忙わしく日を送れば、春も弥生の末にぞなりける。

この時遠近の御館では冠者の太郎忠道主がある日竹世を招き寄せ、

「その方事は勤めの上にも私の計ら無く、萬に心得たる者なれば、頼みたき事こそあれ。我が娘小笹姫は胎毒※の名残りにや、年々に雁瘡（湿疹）※いで来て、春はことさら難儀に及べり。伊香保へ湯治に遣わせば、平癒あらんと医師が云えり。いで湯は筑摩、三坂など、当国にも多かれど、伊香保はその湯柔らかにして、雁瘡に功ある由なれば、彼処へ遣わさんと思うなり。しかれども道中の守護、逗留中の侍事に智勇優れし者ならねば、▼過ち無しとは云い難し。よってその方を小笹姫に付けて遣らんとするなり。いかにこの儀をよくせんや」と問われて竹世は一議に及ばず、

「仰せ承りはべりにき。日頃御恩を受けながら、させる御役に立つ由無きを心苦しく思いたるに、姫上の此度の御供は分に過ぎたる大役なれども御用意よくば何時なりとも御供に立ちはべるべし」と云うに忠道喜んで、

「しからんには発足は明日こそ吉日なれ。乗り物その余の供人は十五人に過ぎざるべし。元より忍びの旅なれば、目立たぬ様に省略したり。湯治はおよそ三週か、もし相応せば、又、五週も入るべし。かかれば四五十日の旅なり。その方萬に心を用いよ。一重に頼む」と懇ろなる仰せに、竹世は言承け（返答）して、明日旅立ちの用意をしつつ、事大方に調いければ、例の下部兩人に酒肴をもたらし、姉の宿所へ赴きけり。この時に折も良く、冢代は早く商いを仕果てて、既に宿所に居り。金蓮助は絶えて久しき竹世がたまたま来るを見て、「彼女は志を改めて、我になびかん為にこそ、折れて来ぬるに疑い無し」と思えば、たちまちにこやかに、

「此は竹世の刀自珍しや。まず此方へと上座へ、塵さへ据えず押しすすめ、いとまめやかにもてなせども竹世はそれに目を掛けず、もたらしたる酒肴をうち開いて置き並べ、姉の冢代にうち向かい、「私今、云うべき事あり。心を留めて聞きたまえ。主君の息女の小笹姫、伊香保へ湯治に赴きたまえば、その御供を命ぜられ、明日は発足しはべるなり。かかれば早くとも三四十日、もし遅くば五十日も遠ざかりはべるべし。我が姉は心正直にて人と争う事無ければ、災いを引き出したまう憂い無きに似たれども只圓過ぎて、一ト角無ければ、人の侮りを防ぐに由無し。まいて御身より歳若く稀なる美男を関坊人にしつつ、浮世を渡りたまえば、世間衆人が口さがなくて、人の嫉みも多かるべし。明日よりして、伊香保より私が帰り来ぬるまで、日毎に商いにいでたまうとも遅く出て早く帰り、門の戸をさし固め、人と交わりたまうべからず。よしや日毎に籠もり居て、商いにいでたまわずとも御身はこれ女の事なり。養う人の無きにはあらず、かかれば私が帰るまで商いを止めたまえ。もし、朝夕の煙りの代の足らずば、ともかくもして私が調達すべきなり。よくこの事を受け入れて、守らんとしたまえ、この酒を飲みたまえ」と云いつつ、ことに大盃へ銚子を傾け、十分注いで、「いざいざ」とすすめにければ、冢代はやがて受け頂いて、

「竹世の教訓道理なり。我れ明日よりして守るべし。いかでか背くものかは」と誓いを成して、その盃を只一飲み飲み干しければ、竹世はその盃に又、酒を多く注いで金蓮助の辺に差し寄せ、「大哥は賢しき人なれば、多く言葉を費やすに及ばず。しかれども関坊人とは預かり防ぐと云う読み声あり。しかれば浮気の行い無く、世帯を預かり世間を防いで、家を治めたまえかし。ことわざにも云える事あり、「垣堅ければ犬入らず」※、この儀をよくよく心にしめて、預かり防がんと思いたまえば、この酒を飲みたまえ」と云わせも合えず、金蓮助は盃を投げうち、囲炉裏の灰に塗らかし、

「此は何事を云われるやらん。我はここへ来る日より、夜遊びにも絶えて出ず、浮気の振る舞いせし事無きに、「垣堅ければ犬入らず」と云うは我に当てつけて疑われると覚えたり。己のみ賢し顔

なる教えは聞くも腹立たし。いかにすべき」と息巻いて、そのまま背戸せどの方に出て、再び団樂まどいに入らざりけり。されども竹世は物とも思わず、なお又、姉と留別りゅうべつ（別離）の酒をしばらく酌み交わし、遂に別れを告げしかば、冢代ぶたよはいとど恋々れんれんとして、▼別れるに忍び得ず。我が姉妹、この日頃そえん、疎遠がちにて過ごせしかども御身おんみが御館みたちにある程は萬よろずに心強かりしが、仮初めながら四五十日、立ち別れば明日よりして後ろ盾無く心細かり。さあ行ってさあ帰りましたまうを待つより他はあらずかし」と云うに竹世は頷うなずいて、

「先にもしばしば云いつる事を忘れたまわで守りたまえば、何事かはべるべき。程無く帰国しはべりてん。さらば」とばかり身を起こし、御館を指して帰り行けば、冢代ぶたよは今更留めかね、門に立ちつつ見送りたる。

これぞこの姉妹の一生涯の別れとは後にぞ思い合わしける。

※胎毒（たいどく）：小児の皮膚病の通称。 ※雁瘡（がながさ）：慢性湿疹。[季] 秋。 ※衆人（しゅうじん）：多くの人。大勢の人。

※垣（かき）堅くして犬入（い）らず：家庭内が健全であれば、外部からそれを乱す者が侵入しないということとえ。

○されば冢代ぶたよはその次の日より餅を売りにいづれども、遅く出て早く帰り、門の戸を閉て込めて閉じ籠もつてのみ居る程に、金蓮助きんれんすけはうち腹立てて、

「世間もあるに、日も暮れぬに門の戸さして籠もり居るは不吉ふきつを招く心にや。商いにいづるとも早く出ねば損のあるを知りつつしびれを切らすは皆世そむに背けたる事ならずや。明日よりはちと早く出て、精出したまえ」とかしがましく罵ののしり懲らすを受け流す、冢代ぶたよは尚も堅く守ののしって罵ののしられども従わず、

「竹世は我が妹ながら思慮いと深き者なるに、彼女が教えを守るこそ、身の幸いの吉事なれ。それを不吉ふきつと云うべからず。しばしが程ぞ。待ちたまえ」と答えて、尚も方の如く守ののしって、明かし暮らしけり。

とかくする程に、はや竹世が伊香保い か ほに発ちしより、二三十日を経にければ、金蓮助きんれんすけも罵ののしり飽きてや、冢代ぶたよが帰る頃になれば、門の戸を下ろしにければ、冢代ぶたよその体を見て、心密かに喜びけり。かくてある日の事なるに、金蓮助きんれんすけは既に早、冢代ぶたよが帰る頃ならんと、門の簾かどすだれを巻き納め、揚げ縁あ えんをも上げばやとて、表の方に立ちいでつつ、簾を巻かんとしてけるに、上の吊り緒が切れしかば、簾ははたと落ち掛かり、門辺かどべを過ぎる女の頭こうべに雪崩掛なだれかって打たんとせしをその女はちっとも騒がず、右の腕かひなを差し伸ばし、すかさず簾を受け止めて、後ろの方へ跳ねしかば、幸いにして怪我もせず、櫛くし、笄こうがい だも折らざりけり。金蓮助きんれんすけは思い掛け無あやまき過あやまちしつと驚き騒いで、揚げ縁あ えんより走り降り、その女にうち向かって、

「いかに怪我はしたまわずや、簾すだれの吊り緒の切れしかば、此上こよ無あやまき過あやまちしいだしたり。許したまえ」と手を擦わって、詫わびるを見返るその女はむっとせしより、思いのままに云い懲こらさんと思いつつ、初めて顔を見てけるに、類たぐい稀まれなる美男にて、都にはありと云う歌舞伎役者の舞台顔にも劣らじと思うになん。たちまちにっこほほえと微笑んで、

「否、幸いいなに怪我もせず。よしや頭こうべに傷付くともいばかりの事やははべる。さるを素足で走り出て、詫わびたまうこそ気の毒なれ。さては足さえ汚れんに、まざまず上がせたまえかし」と云われて落ち着く金蓮助きんれんすけは喜びを述べ無事しゆくを祝すだれして、簾あを抱えんえて揚げ縁いくたびへ上れば女は幾度となく見返り見返り急ぎ行く。この時、冢代ぶたよの隣ちやみせの茶店の嬢かかにお温うばと云う者、門口かどぐちに出て居り、この有様ありさまを遙か

に見て、「ヲヤヲヤ危ない、^{こうがい}笄を折られたらば、どうなさる。コリヤ、ねぢ込んで一出入り。訳を告げずばなりますまい。笑止笑止」と囃しけり。その女は日頃より、お温の店へ疎からぬ得意なれば、かくの如くうち戯れて囃せしなり。▼されば今金蓮助が簾を落とし掛けたる女をいかなる者ぞと尋ねるに、遠近殿の西門前の薬師店の後家にして、その名をお啓と呼ばれたり。よって世の人あだ名して西門啓とも云えりける。年齢は既に四十路に及べど、顔容麗しければ、三十五六と見えるのみ。夫は先に身罷りしかど、男勝りの女なれば、後家持ちにして入夫を迎えず、元より良く偽薬を作るに妙を得たりしかば、自ずからに家富み栄え、手代なども数多あり。常に領主の遠近殿の重役に物を贈って、交わりを結びしかば、商人ながら勢いあり。これのみならず、その上の習わしに従って、居合、柔の技をさえ、をさをさ心掛けたりける。いと腹汚き者なるに、色を好んで、すりみがき、心に叶う良き男をこれかれと選めども、田舎には百人に一人も見欲しき者は無きに、今凶らずも金蓮助の面影を見て心迷い、そのままに隣の茶店に尻を掛けしかば、お温は出し茶を汲みすすめ、

「西門屋の御後室様、この頃はお見限り。一向おいでになされませぬ。罰が当たって簾の押し縁※、危ない事で御座りました」と云いつつ、いたくうち笑えば、お啓もにこにこうち笑んで、

「あれは隣の御亭主にや。いかなる女の夫ぞ」と問えばお温は微笑んで、

「あの人の奥様は古今無双の悪女なり。まず試みに当てて御覧」と云われて、しばらく頭を傾け、「口舌屋のお琳ならんか、長生屋のお肇ならんか、それかこれか」と両三人、云えども云えども当たらずとて、お温はいよいよ笑うにぞ、お啓は根を疲らして、

「我れは実に思い得ず。誰にかあらん、知らせたまえ」と問うにお温は物々しく、

「あの人様の奥様は御身も見知りて御座するならん。日毎に餅を売り歩く一寸星の冢代なり」と告げるにお啓は吹き出して、

「さてさて世の中の花には毛虫、月に雲、あんな美男を可哀想に、冢代を妻に持たするは結びの神の御粗相ならん」と云いつつ、しきりに隣の方を差し覗き、思いかねてや立ち出て、その門辺を幾度か行き戻りして、又、更にお温の床机に掛かれどもとにかく尻は落ち着かず、「明日又来るべし」と暇乞いして、その黄昏に忙わしく宿所を指して帰りけり。お温は門に見送って、

「あの後家様は金蓮助男に浮かれて、いたく急たるならん。我又、彼をそそのかし、金にせばや」と胸巧み。その次の日に待つ程に、果たして次の日の昼過ぎにお啓後家は再び来て、床机に尻をうち掛けければ、▼お温はやがて埋め湯をすすめて、

「昨日より、お足の近さよ。貴女様は未だお若いに、何故に旦那をばお持ちなされぬ。一人仲人致しましょうか」と云うにお啓は打ち笑い、

「良い塩加減の代物ありや」と問えばお温は顔いて、

「御座りますとも、御座りますとも。年の年齢は銭百にて持参には孫十人、曾孫八人の齋しあり。これはいかが」と打ち笑えば、お啓もまた笑いつつ、「久しいもんだ、なぶるのか」と云いつつ隣を差し覗けば、お温も共に差し覗き、

「只今云いしは戯れなれども、あなたが真に気があれば、お仲人を致しましょう。仲人賃は十両なり。安いものさ」とそそのかせば、お啓は思わず小膝を進めて、

「そなた私の胸の内を悟って云うか、いかにぞや」と問われて、お温は声を潜め、

「昨日簾の落ち掛かりしより、早く見て取る私の眼力。やるものでは御座りませぬ。つきて一つ

はか ごと
の謀り事あり。これに従いたまわれれば、会いたまう事いと易し」と云うにお啓は勇み立ち、
「いかでかは従えば会いたまう事いと易し」と云うにお温はすり寄って、
「御苦労ながら、白羽二重三匹ほど買い調べ、真綿もおよそ二十疋ばかり。この二品をはずみたま
えば謀り事を行うべし。その謀り事は斯様斯様」と耳を引き寄せ囁けば、お啓は深く感心して、
「真に御身は今の世の孔明、楠木※とも云いつべし。しからんには今よりして呉服屋へ赴いて、彼
の二品を求めて来なん。あら忙しや」と身を起こし、早外の方へいでたるが、しばらくして呉服屋
よりお啓は荷持ちに羽二重と真綿を持たせて立ち帰り、代物を受け取って、荷持ちを返して、しか
じかとお温に見せて、
「謀り事をさあさあ行いたまえかし」と云うにお温は頷いて、
「しからば、冢代が帰らぬ隙に、私は隣へ行って来ん。しばらくここに待たせたまえ」と云いつつ、
やがて背戸口より冢代の宿所に赴けば、金蓮助は早く出迎えて、
「隣のお袋来ませしか。たまたま店の暇故にや」と問えばお温は
「さればとよ、唇があれば借りて見んと思うてちよっと来るのみ。まず聞きたまえ、世の中には慈悲
善根の人もあり。私が年の寄りたるに死仕度の掛け無垢をいと欲しく思えども力に及ばぬ事なるを
思い掛け無き施主あって、反物を多く施したまいぬ。よって御身を頼み申して、仕立ててもらいは
べらん為に唇を見まく欲しかるなり」と云えば、金蓮助頷いて、
「そはいと易き事なりかし。日柄良ければ明日なりとも裁ち縫いせん事は難くもあらず」と云うに
お温は喜んで、
「同じくは我が方へ来まして縫わせたまえかし。貧しきこの身の悲しさは手離して縫わしては彼の
人様が来たまう時に、もしや質にも入れたるかと思われんかと後ろめたし。明日は良き日と予ねて
聞きぬ。しからば唇を見るにも及ばず、この儀を請け引きたまえかし」と云われて、金蓮助は頷い
て、
「此の頃は暇なるに、御身の宿所へ赴いて縫う事いと易し。しからば明日より始めんか」と云
うにお温は喜んで、いよいよ堅く約束しつつ、明日と契って忙わしく己が店へ帰り来て、お啓が辺
へ立ち寄って、
「まず一口は埒明いたり。全て斯様の駆け引きには埒明き仕事と云う事あり。明日よりして彼の人
が私の方へ来たらんには酒肴にてもてなすべし。御身は二日間を置いて、第三日目に来たまえか
し。その時私は出迎えて、斯様斯様に云うべきに、御身は近く居寄りたまえ。しかれ共、彼の人
が避け隠れんとする事無く、そのままそこに居るならば、これ又一つ埒明くなり。その後酒をい
だすべし。彼の人とは又、これを見て、相手になって酒を酌めば、これ又一つ埒明くなり。さて酒
盛りの最中に私はそこを外すべし。御身は酔いたる体にもてなし、斯様斯様にして見たまえ、か
くても彼の人
が恥じる事無く、共に弾みて手をいませば、これ薩張と埒明くなり。この事一つも手違いあ
れば、この恋は叶い難し。思い切りたまえかし」と云うにお啓は喜んで、
「云われる趣は心を得たり。さらば明日より第三日目に私は門より咳きせん。合図を違えた
まうな」と約束しつつ、夕越えてお啓は宿所へ帰りけり。

※押し縁(おしぶち):板などを上から押さえるために打ちつけた、細長い竹や木。

※孔明、楠木(こうめいくすのき):講談などでは楠木正成が『三国志演義』の諸葛孔明の天才軍師的イメージを重ねて語られる。

○かくて次の日金蓮助は冢代が出て行きし後、糸と針を持って背戸口よりお温の宿所へ▼来にければ、お温は喜び座敷へ請じて、茶をすすめ、菓子すすめ、又、昼飯の仕度して、酒肴も念を入れ、いと懇ろにもてなしければ、金蓮助は厚く礼を述べ、その日冢代が帰る頃、辞して宿所へ帰りしかば、冢代は金蓮助の顔の色の赤かりしを見て由を問えば、金蓮助は包むに由無く、斯様斯様と告げるにぞ、冢代は聞いて、

「しからんには明日は銭を持って行って、振る舞い返しをしたまえかし。人の馳走にのみ会うは良からぬ事ぞ」と云うにより、金蓮助は次の日に銭五百文を持って行って、

「今日は又、これをもて酒肴を調えたまえ。これ我が小指の指図なり」と云うにお温は逆らわず、その銭に又、四五百足して、いよいよ厚くもてなしけり。

かくて第三日の昼頃に、お啓は早く門に来て、咳きして合図を示せば、お温は早く出迎えて、やがて座敷へ誘いつつ、金蓮助に引き合らし、

「この御方は西門屋の女主人に御座します。我が白小袖の施主なれば、幸いの折になん。願うは我儕に替らせたまいて、金蓮助主をもてなしたまえ」と云うにお啓は一議に及ばず、小判一両投げ与え、酒肴を買わせつつ大酒盛りになりしかど、金蓮助は自若※として、いささかも退く気色無く、相手になって酌み交わす、実にや酒は色の仲立ちにて座席も既に乱れしかば、お温は銚子を替えんとて、外して納戸へ赴きつつ、芋をうみて※こそ居たりけれ。その時お啓はひどく酔いたる体にもてなし、しなだれ掛かれば、金蓮助も岩木にあらぬ下地は好きなり。ついそれなりに引き寄せて、人目を忍ぶ転び寝に深き仲とぞなりにける。

事果てし頃、お温は立ち出て、「御身兩人、肝太くも良き事をしたまいしな。冢代殿に告げ知らして、辛き目見せんと云うは偽り、明日よりして末永く、出会いたまえ」と打ち笑えば、二人もどつと笑いけり。

※自若(じじゃく): 落ち着いていて、慌てないさま。自如。 ※芋うみ(おうみ): 青芋から糸をとる作業

傾城水滸伝 第五編之四 曲亭馬琴著 歌川国安画

さる程に金蓮助は一度西門屋のお啓に契り初めしより、冢代が商いにいづる毎にお温の宿所へ赴いて、戯れ遊ぶ事絶え間無く、例えれば魚と水との如し。さればお温は十両の骨折賃を取りしのみならず、日毎に酒肴の費えを何くれとなく皆お啓の賄いなれば、萬に掠りが少なからず生業をうち捨てて彼らが為に太鼓を持ち、ひたすらお啓をそそのかせば、さしも日頃は出し汚く賤しく吝しい(ケチな)後家なれども、色に迷えば銭金を湯水の如くに使い捨て、お温の宿にて日を暮らせば、辺りの輩も皆知って知らざる者が無きものながら、只、冢代のみこれを知らず、その身は暇無きまでに商いに精を出しかば、女にはいと稀なりとて哀れお者が多ければ、餅はいよいよ売れにけり。

ここに又、遠近の里人に運蔵と云う若き者あり。年の頃は十五六にて、六十に余る父親只一人あり。孝行と云う程にはあらねども、親を疎略にせざりしかば、日毎に水菓子(果物)を売り歩いて細き煙りを立てつつもよくその親を養いけり。しかるにこの頃は林檎の出始めなりければ、運蔵は林檎をあちこちへ持て歩くに、西門屋は近頃よりの得意にはありけれども、さすがに富める商人なれば、

常に初物いづる毎に第一番に持て行き、必ずお啓に売るをもて、この日一籠の林檎を携えて西門屋へ赴きしに、お啓が宿所に居らざれば、たちまち望みを失って、行きたる先を尋ね歩くに、ある人密かに教える様、

「西門屋の後家殿は近頃冢代の関防人の金蓮助と訳あって、日毎に茶店のお温の宿にて、出会わずと云う事無し。今日も彼処へ通りぬるを我は定かに見とめたり。彼処へ行かば会う事あらん」と云うに運蔵は喜んで、お温の茶店へ赴きつ、

「おらが得意の後家様は奥座敷に居わせるならん。ちょっと呼び出してたまわれ」と云うにお温はあざ笑い、

「得意の後家とは誰が事ぞ。例えの節の八百八後家、世間に後家はいくらもあり。俺は知らぬ」と空嘯くを憎しと思う運蔵はむっとしながら、

「これ、お袋。▼ここへ毎日来る後家は問わずと知れた西門屋の女主人、朝から晩まで引きずり込んで、一人良い事するであろうは汁なりとも、吸うて見んとて林檎を売りに、わざわざ来た。隠さずに運蔵が参りましたと云うたとて、さのみ恩でもあるまいわえ」と云うにお温は大きに怒って、
「果物かじりがふさふさしい(厚かましい)。西門屋の東門屋のと、そんなお方を知るものか。出て行くならば早く行け。戯言尽くすと顎引き裂くぞ。行きおらぬか」とつと立って、握り拳の刃の峯、横面はたと打ち歪めれば、「此の婆め」がと組み付くを組ましも果てず突き退けて、臂近なる粗朶(薪)を取り上げ打たんと進む勢いに、運蔵は辟易して林檎の籠を引き担ぎ、足に任せて逃げ去りけり。

○されば又、運蔵は行く先毎に間が悪く、商いが得もせず、あまつさへお温に打たれしをいと口惜しく思えども、さすがに腕の悲しさはおめおめとして逃げ退き、なおあちこちと売り歩くに、撲虎功德の碑の辺で図らず冢代に行き会いけり。そもそも此の碑は先に虎を手打ちにして所の害を除いたる竹世の功德を後の世まで、残さん為に里人らが銭を集めて石に彫りつけ、信濃の国の博士と聞こえし、大江の朝時に碑銘を書かせ、道の辺に建てたるなり。その時冢代は声を掛け、
「運蔵よ、何時とても商いに精をいたすよ。親御は無事か」と尋ねれば、運蔵も又、進み寄り、
「姉御よ、久しく会ませぬが、我れよりも御身こそ商いに精を出して、良い銭儲けをせられるならん。されば留守には大盗人に逢うをも知らず、痛ましや」と云うを冢代は聞き咎め、
「我は盗人に逢うたること無し。戯れ事も事による、要無い事を云わずもあれ」と云うに運蔵あざ笑い、

「戯れ事を云うべきか。御身は日毎に大盗人に逢いたまえども、知らぬが仏、地獄の沙汰も金次第。その盗人は黄金家にて、盗まれる者も又、得心づくで盗ませる。奇妙な事ではないかいの」と云うに冢代はようやく悟って、売り残ったる餅十四五を盆に載せつつ差し出して、

「運公。まずこれを食べ、盗人の訳つぶさに告げよ」と云えば運蔵は手に取って、餅残り無く食い終わり、

「此のくらいな鼻薬で、大事の事を告げられようか。もし真砂屋でも奢るなら、話して聞かそう、奢らぬか」と勿体作ればもどかしく

「奈良茶ぐらいは奢らいで、さあさあ御座れ」と先に立ち、仕出し屋に赴きつつ、まず運蔵に酒を飲ませ、飯を食わせて機嫌を取って、その密議を尋ねれば、運蔵は声を潜めて、

「御身は実に、まだ知らずや。関防人の金蓮助は西門屋の名代後家と、いつしかに乳繰り合って、

毎ちやみせに茶店のお温うばの宿所しゆくしょで組んづほぐれつ大騒ぎ。世間に知らぬ人も無し。亭主なりとも余りの
法外ほうがい、まいてや彼は関防人かんぼうにんにて、不義悪戯ふぎいたずらをせまいと云う証文しょうもんを元の主人あるじへ入れて、御身おんみへ縁付き
しと云う事も人の知るところ。御身おんみは男おんみに不義ふぎをさせ商いをして過すごす故ゆえ、大盗人おおぬすびとに逢いたまいぬ
と云いしなり。云われはかくぞ」と焚き付ければ、冢代ぶたよはひどく驚いて嘆息たんそくする事数多度、
「云われる趣おもむきが偽いつわりならずば、彼の人の元あるじの主人あるじへ断り云って、離縁りえんするともいと易き事ながら、
その主人あるじは去年の春に身罷りたれば、それも詮無せんなし。所詮しよせん公おおやけへ訴えて、追うんぞうい出すこそ近道とどならぬ」
と▼云うを運蔵うんぞうは押し止め、

「その後家くにかみは此の年頃、国の上おもひとの重役まいないへ賄賂おんみを贈るをもて、例え御身おんみがしかじかと訴えていづれど
も証拠無ければ取り上げられんや。例え離縁りえんに及ぶとも逆ねじされて、手切れの金しんしょうも身上しんしょうを粉こなに振
るべし。それよりも手短かに彼ら二人が出会うをうかがい、引き捕らえて、恥面はじつらかかせ、丸裸まるなにし
て追うんぞうい出したまえ。その謀はかり事は斯様かよう斯様」と耳みみを引き寄せ囁ささやけば、冢代ぶたよはほとんど感心かみして、
「そは上みょうさくもなき妙策かしこなり。しからば明日彼処あしたをうかがい、御身おんみはお温うばを引き捕らえ支える隙ひまに、我儕わなみ
は又、奥の座敷へ踏み込んで、うまく二人を捕らうべし。手筈てはずを違たがえたまうな」と示し合あわして、
立ち出て、その日はそのまま別れけり。

○その日も西へ傾く頃、冢代ぶたよは家路へ立ち戻るに、金蓮助きれすけは既にして早く宿所しゆくしょに帰りて居り。され
ども冢代ぶたよは聞きつる事をちっとも気色けしきに表さず、その次の日も常の如くに商いにいづるものから、
九ツ頃に運蔵うんぞうの宿所しゆくしょの方へ赴く程に、彼も又、冢代ぶたよを尋ねて端なくも行き会うたり。その時運蔵うんぞう
は声こゑを潜めて、

「今は時刻が早ければ、彼の後家かは未だ来ず。いつも来るのは未の頃なり。御身おんみはお温うばの居廻りいまわ
を立ち離れずにうかがいたまえ。我も又、そこらに隠れて二人が出会うを見届けなん。必ず抜かりた
まうな」と云うに冢代ぶたよは心得のちて、後と契ちぎって別れけり。

○さる程に金蓮助きれすけは冢代ぶたよが出て行きし後、お温うばの宿所しゆくしょへ赴いて、今日もお啓を待つ程に、ハツの
頃になりしかば、お啓も来つつ奥座敷にて、酒酌かみ交あわし遊び戯れ、早く臥所ふしどへ入る折から、運蔵うんぞう
は蝗いなごの如くお温うばの茶店へ駆け込んで、

「畜生婆ばばめ。昨日の仕返し覚えているか」と罵ののして、しっかりと捕らえて動かせず。その時冢代ぶたよは一
散いちさん（一目散）※にお温うばの店へ走り来て、奥を目掛けて入らんとするをお温うばは見つつ驚き騒いで、組み止
めたりし運蔵うんぞうをもぎ離さんともがけども、運蔵うんぞうは一生の力を出してちっとも離さず、お温うばはいよいよ詮方無せんかたさに、

「お二人さん、お二人さん。ソレソレ冢代ぶたよが来ましたぞ」と声張り上げて知らせるに、金蓮助きれすけ、お
啓は驚き慌あわてて、内よりしかと襖ふすまを押さえて、開けさせじとぞ構くえたる。されば冢代ぶたよは両手を掛けて
開ひらけよ、開ひらけよ」と呼び張れば、お啓はいよいよ狼狽うろたえて、逃げいでんとしつれども、後ろの方は壁かべにして、只一方
口くちなりければ、いかにせまじと気を揉むのみ。

金蓮助きれすけは胸を据すえて、

「とにもかくにも此の場に及んで、逃げ隠くるともその甲斐ひりきは無なし。我は非力の者なれば、手荒あき
技わざは不得手ふえてなり。御身おんみはをさをさ柔やわらの手をも良くしたまうにあらずや」と云われてお啓は頷うなずいて、

「実に、我ながら狼狽えたり。そこ開けたまえ」と裳裾を引き上げ、襖の辺へ立ち寄れば、金蓮助は押さえた襖をさらりと引き開ける。外の方には急に急たる冢代が襖の開くを見て、走り入らんとする所をすかさずお啓がはたと蹴る。女に似気無き柔の一当て。冢代は胸をしたたか蹴られて、あっとばかりに▼仰け反り倒れ、眼を見張り歯を食いしばり、早人心地も無き如し。運蔵はこの時までもお温を支えて離さざりしが、冢代がもろくも蹴倒され息も絶え絶えなるを見て、叶わじとや思いけん。矢庭にお温を振り捨てて、後も見ずに逃げ失せけり。その時お温は母屋に上って、倒れし冢代をと見かう見つつ、「此は大変ぞ」と忙わしく、顔に水を吹き掛けて、様々にいたわれば冢代はようやく息吹き返し、「ああ苦しや、胸痛や」と云う声も只、冬枯れの虫より細き呼吸の衰え。かくてあるべきにあらざれば、まず早宿所へ返さんとて、金蓮助はようやくに冢代を肩に引き掛けて、背戸の方より忍びやかに宿所へ帰って、お温諸共、冢代を二階へ背負い上げ、布団を敷いてうち臥せさせ、夜着を引き掛けなどするに、冢代は胸が痛むとてうめく事絶え間なけれど、金蓮助は見返えらず、その次の日も朝湯に入って、髪月代して磨きあげ、お温の宿所へ赴いて、お啓と共に余念無く遊び戯れ、はばかりの事なし。辺りの者は既に早、事の由を伝え聞き、いと苦々しく思えどもそを正すべき事ならねば、只仮初めに見舞い口上を門口より述べるのみ。竹世の他に親類無ければ、冢代は湯水も不自由に日夜苦しむばかりなり。かくて或る日の事なるに、金蓮助は二階に上って、臥したる冢代を差し覗けば、冢代はこれと呼び留めて、

「私は予ねて御身の不義を知らざるにあらねども、只、穩便に済ませしに、余りにはばかりの事無ければ、只、懲らさんと思いに、悪たれ後家に胸を蹴させて、かくの如くに苦しませ、薬一服も飲ませぬはこれいかなる心ぞや。今日より志を改めて、粥をすすらせ、薬を飲ませ、良く看病するならば、関防人の甲斐もあり。さらば竹世が帰り来るとも我は決して御身らの不義の事を告げるべからず。もし此のままに捨て置くなれば、竹世に告げて恨み返さん。どのみち了見したまえ」と恨めしげにぞ口説きける。

されども金蓮助は答えもせず、そのままお温の宿所に至って、先に冢代に云われし事をお啓、お温に告げしかば、お啓はひどく驚き恐れ、竹世が虎をうち殺せし手並みは誰も知らぬ者無し。彼女が帰り来て、我々を恨んで仇を返されれば、いかにして防ぐべき。事の大事になりなき」と云うをお温は笑いつつ、

「その儀はちっとも氣遣い無し。御身たち二柱が夫婦にならんとしたまえ、私一つの手段あり。手間隙入らず、冢代を殺して人の口を塞ぐべし。さてその薬は他にはあらず、後室様は薬種屋なれば、さる物も必ずあらん。それを何ぞと尋ねれば、斯様斯様の毒薬なり。金蓮助主は此の他に薬一服用意したまえ。この二品を調べて、金蓮助主はまめやかに冢代殿を看病し、始めは薬をすすめるべからず。始めより薬をすすめれば彼の人必ず疑って浮々とは飲むべからず。かくて彼の人を欺き済まして、薬を飲まんと云われる時、振り出し薬を出して見せ、煎じる時に毒を入れ、斯様斯様に計らいたまえ。定めてかの人めくちは目口より血を吐き即座に死なん。予ねてより湯を沸かし置き、その血を拭って亡骸を棺へ納めたまえかし」と毒気を吹き込む邪慳の裁判。兩人深く喜びつつ、お啓は宿所に赴いて、かの毒薬と一服の振り出し薬を携え来て、やがてお温に差し示せば、お温はこれをとくと見て、「是さえあれば氣遣い無し。必ず抜かりたまうな」と云いつつ金蓮助に渡すにぞ、金蓮助はこれを受け取って、

「冢代がころりとごねし(死ぬ)時、取り扱いに我一人では心もと無き所あり。お袋も来て手伝いた

まえ」と云うにお温は頷いて、

「そは心得てはべるかし。真夜中頃で▼あらんとも背戸に来て戸を叩きたまえ。必ず行って手伝うべし」と云うに金蓮助は安堵して、事の手筈を云い合わせつつ、別れて宿所へ帰りけり。

※一散（いっさん）：一目散に走る、わき目も振らず我武者羅（がむしゃら）に走る。

※邪慳（じゃけん）：意地が悪く、人に対して思いやりのないさま。薄情。

○さる程に金蓮助は忙わしく宿所に帰って、去らぬ体にてしとやかに冢代の枕辺に立ち寄って、
「ナウ冢代殿。先に御身に云われし事をつくづくと思ひ見るに、皆これ己が過ちなり。我が身は御身の夫にして、表向きは夫にあらず。女狂いをすべからず、求めて離縁をすべからずと箇条の証文を取られしは元の主人の裁判にて、関防人の事なるに、日頃御身を疎略にし漫ろに仇します花に迷いしをこそ面目無けれ。今日より志を改めて、彼の後家の事はしも、ぶっつりと思ひ切ったり。かかれば昼夜看病して全快を祈るべし。恨みを晴らしたまえかし」と真しやかに口説けば、冢代は深く喜んで、

「云われる趣が偽りならずば、妹竹世が帰るとも隠して彼女に知らせはせじ。私は此の四五日は枕元に置かれたる飯櫃を引き寄せて、湯漬けを僅かに半方づつ食べて命を繋ぐのみ。薬を飲まねば胸の痛みはいささかも怠らず。もし良き薬が有りもせば、飲ませたまえ」と他事も無き言葉に金蓮助心ではしてやったりと思えども気色に決して表さず、

「御身が怪我をしたまいし、その次の日に軽井沢の木庵老に家伝の名法、打ち身の薬ありと聞き、予ねて求めて置きたれども、大方は疑って飲みたまわじと思ひしかば、すすめも得せで、そのままあり。その薬は打ち身にて胸が痛むにわきて効あり。夜の丑三つに用いれば、癒ゆる事疑い無しと確かに教えられしなり。これ見たまえ」と云いつつも、予ねて巧みし振り出し薬を取り出して差し示せば、冢代は手に受け嗅いで見つつ、

「此は良き匂いの薬なり。夜中に煎じてたまえかし」と云うに金蓮助密かに喜び、その夜九ツ時よりして、その薬を煎ずるに、彼の毒薬を掻き混ぜて、用意既に調べば薬茶碗へ注ぎ入れ、「いざ」とてやがてすすめるを冢代は受け頂いて、一口飲んで眉ひそめ、「この薬はいと飲み難し」と云うを金蓮助は聞きながら、

「良薬口に苦しと云わずや。飲み難くとも尽くしたまえ」と云われて、「実にも」と思い返して、再び飲むを金蓮助は手に持ち添えて、勢い任して注ぎ込みたりければ、冢代は遂にその薬を残り無く飲みにけり。その時金蓮助は夜着を引き寄せ頭の上よりうち着せれば、冢代は驚き「此はいかに。などてかくはしたまうぞ」と云えば金蓮助は

「さればとよ、薬を用いて一汗かかねば、その効薄しと医師は云えり。しばらく辛抱したまえ」と云う間もあらず怪しむべし。冢代は一声「あっ」と叫ぶを声立てさせじと金蓮助は夜着の上より▼馬乗りに上しかかり、しかと押さえて、その声止めれば、冢代は手足をものがくのみ。おびたたくも血を吐いて、そのまま息は絶えにけり。

かくて金蓮助は背戸よりお温を招き寄せ、事の由を告げるにぞ。お温は布を湯に浸し、血潮を早拭い取り、兩人して亡骸を下屋へ下ろす北枕、次の日辺りへ告げにけり。かくてその明けの朝、お啓後家がとく来て、冢代が死したる由を聞き、喜ぶ事大方ならず。お温、金蓮助諸共に酒うち飲ん

で談合するに、お温はしばしうち案じ、

「ここに一つの難儀あり。彼の亡骸を土葬にすれば、竹世が万一掘り出して見んと云わんも計り難し。火葬にする事もろんなれども彼の隠亡(火葬役)※の久念が亡骸を検めて、かれこれ云えば難しからん。いかにせまじ」とひそめけば、お啓は聞いてちっとも騒がず、

「彼の久念は私の夫が身罷りし時、金多く取らせれば、私を知れり。まず語らって見つべきなり」と答えて、やがて立ち出て、その庵へ赴く道にて久念に行き逢いけり。常には疎き仲間ながら、互いに見忘れざりければ、「これはこれは」とばかりに、つつが無きを祝すれば、お啓は辺りを見回して、

「ちと頼みたき事あれば、そなたへ向って行かんとせしに、ここにて会いしは幸いなり。此方へ来ませ」と先に立ち、仕出し酒屋へ伴いつつ、酒を飲ませ飯を食わせ、金十両を取り出して久念にこれを贈れば、久念は呆れ果て、その故を尋ねるに、お啓は声をひそまして、

「頼みと云うは余の儀にあらず。餅売りの一寸星冢代が昨日病死したれば御身を頼んで火葬にすべし。よしや死骸にちとばかり言い分がありとても大目に見て焼きたまえ。穩便に為し果てれば、なお又、悪しくはすべからず」と云うに久念は驚いて、

「・・・察する所、その死骸は疑わしき筋のあるなるべし。しからんには此の金を受けてはこの身の破滅とならん。只このままに返さん」と思うものから、

「・・・此の後家は領主にも金を出して重役らにも親しければ、その密談を聞かじと云えば必ず恨んで仇をやなさん。まず仮初めに受け取り置いて、詮術あらん」と思案をしつつ、

「お頼みの事は承知せり。この賜物は預かり置くべし。必ず氣遣いしたまうな」と云うにお啓は喜んで、なお念を入れ期を押して、酒屋を出て別れけり。かくて隠亡久念はお啓後家と立ち別れ、庵へ帰らんとする程に、弟子の隠亡が尋ね来て、

「昨夜餅売りの冢代が身罷りたりとて、関防人金蓮助と云う者より火葬の事を云い越したり。行つて見たまばや」と云うを久念は聞いて、心の内には「さては」と思えどもちっとも騒がず、

「しからばここよりすぐさま行って、火葬の日限を問定むべし。我らと共に来よかし」とて、師弟兩人、冢代の宿所に赴いて、金蓮助に対面し、亡者の病歴を尋ねるに、「胸痛にて果てたり」と云う。まず亡骸を一見せんとて、金蓮助と諸共に死したる人の辺に立ち寄って、布団かいたり、つつら見るに、身の内紫に腫れ上がり、眼を塞がず目口より血潮流れて悪相を表したり。これ只、変死と見る程に、久念は毒氣に当たりけん、「あっ」とばかりに仰け反り倒れて、早片息になりしかば、弟子の隠亡、金蓮助らお温も共に介抱して、様々にいたわれどもとみに怠るべくもあらねば、久念を駕籠に乗せて、弟子の隠亡が付き従って、そのまま庵へ歸しけり。さる程に、久念は己がいおり庵へかき入れられるに、その妻はひどく驚いて、やがて納戸へ助け入れ、薬をすすめていたわるに、久念たちまち起き上がり、辺りを見廻し声をひそめて、

「毒氣に当たりし体にもてなし、我が倒れしは偽りなり。冢代の死骸を見てけるに毒害されしに疑い無し。しかれども西門屋のお啓より十両の金を贈られ、頼まれたる事あれば、明から様には訴え難し。よって火葬の日限を延べんと思ひし当座の作病。形の如くに計らいぬ。さていかにして、後難を逃れるべきや」と囁き示せば、その妻しばしうち案じ、

「冢代の妹竹世とやらんが帰って後に火葬にせば、これその死骸に訳無きなり。又、取り急いで焼けど云えば、訳のある事疑い無し。しからば御身は忍びやかに冢代の骨を一つ二つ残し留めて隠し

置き、且つお啓より贈りたる十両の金もそのままに、年月を書き付けて封じ置けば、竹世が帰って正すとも言い訳の立つならずや」と云うに久念は喜んで、形の如くに計らいつ、次の日冢代の宿所に至って、病癒えたる由を告げ、火葬の日限を尋ねるに、二日の内にと急ぎけり。▼

さる程に金蓮助は法師を招いて経を読ませ、冢代の棺をもたげ出して久念の庵へ送るに、辺り近き里人らも等しくこれを送りけり。既に火葬にするに及んで、久念は只一人、火屋の内へ進み入り、焼け残りたる冢代の骨を二枚ばかり取り隠すに、その骨の色、或いは黒く、或いは紫になってあり。これその毒気のなす所の血の証拠と、金諸共に葛籠の底に秘め置きつ、又、棺を送りて来ぬる里人の名も一人一人書き留めて、これをも秘め置きたりけるを知る人絶えて無かりけり。

※隠亡(おんぼう): 古く、火葬や墓所の番人を業とした人。

かくてその次の日は灰寄せとて、金蓮助、お温も共に来て、白骨を壺に納め、里の墓所にぞ葬りける。かかりし程に、遠近殿の息女小笹姫は伊香保の湯治も相応して五週を過ぎたまうに、病本復ありしかば、なおあちこちと名所、古跡をうち巡りたまいつつ、往来五十一日目にて御館へ帰りたまひしかば、御父忠道は喜びたまいて、御供に立ちたりける竹世にはなかんづく物を数多賜り、休息の暇をもたまひぬ。これにより竹世は部屋に退いて休息せんとする程に、此の月頃炊事の為に使われる下部どもが囁いて、

「未だ知らずや御座すらん。姉御は既に世を去りたまいて、三十五日も過ぎたりとぞ。いと痛ましき事なりかし」と告げるに竹世は驚いて、

「我れ近頃は夢見が良からず、折々胸の騒ぐ事あり。かかればその風聞は空言にはあらざるべし。いでいで行って尋ねん」とて身ごしらえして、忙わしく冢代の宿所へ赴きけり。されば又、金蓮助は冢代を葬り果てし後、お啓を二階へ引き入れて戯れ遊んで日を過ごすに、思わず竹世が来にければ、「此はいかに」とうろたえ騒いで、お啓はそのまま屋根伝いにお温の宿所へ逃げ退き、金蓮助は結い立ての鬢の毛をかき乱し、目縁へ唾を塗りなどしつつ、一人二階より下りたちて、

「此は妹御が来ませしか。長き伊香保の御供なりしをつつがなく帰らせたまう。そを目出度しと云うべきか、又憂わしきと云うべきか。こもとはは大変あり。冢代殿は胸痛の病に薬の印も無く、遂に身罷り候いぬ」と云いつつ瞼を押し拭えば、竹世は形を改めて、

「その事は帰って後に人の噂に聞つるが、さては真ではべりしな。我が姉は此の年頃胸痛の病無かりしに、いかにしてさる病が俄かに起こって身罷りたまひし。心得難き事にこそ」と云うに金蓮助は鼻うちかんで、

「天に不思議の風雨あり。人に不慮の病あり。年頃病まぬ胸の痛みの起こりしを心得ずと今更に云うべからず。身罷りたまひし後の事も我が手一つに詮術無く、多くは隣のお温殿の助けによって、とやらこうやら野辺送りを致したり。心尽くしを察したまえ」と云うに竹世は頷いて、

「そは良き人の情けなり。但し土葬にしたまいしか、又、火葬にしたまいしか」と問われて金蓮助は「さればとよ、亡き人の遺言なれば久念の火屋に送って、火葬にして候なり」と云うに竹世は再び問わず、

「まずまず焼香しはべらん」とて納戸の方へ赴けば、冢代の位牌に机を据えて、小屏風を立て巡らし、香花(仏前花)も形の如く、灯明も上げてあり、有りしに変わる有様に竹世は胸まず塞がって、

さめざめとして居る程に、金蓮助はその後ろより数珠押し揉んで額を突き、空回向をぞしたりけり。
その時竹世は鈴打ち鳴らし、心の内に念ずる様、

「・・・我が身が伊香保に在りし程、姉御前が身罷りたまひし事、その疑い無きに非ず。もし悪人に謀られて、非命に世を去りたまわれれば、それらの由をしかじかと夢になりとも告げたまえ。仇を討ち恨みを返して、その怨恨を慰め申さん。南無阿弥陀仏」と念じつつ、しばらくして眼を開けば、怪しむべし、冢代の面影が影の如くに現れつつ、煙りの如く消え失せけり。竹世は驚きうち嘆き、

「たまたま姉の亡き魂がここに姿を現したまえど、私の陽気に蹴押されて、しばしも言葉を交わす事の得ならざりけん悲しさよ。彼と云い、是と云い▼、事大方は推したり。要こそあれ」と腹の内に思案をしつつ、色にもいささず又、近き日に参らんとて身を起こしつつ、金蓮助に暇乞いして立ちいずれば、早黄昏になりしかば、その日は御館に帰りつつ、その終夜も寝られず、その次の日も只一人、懐剣一振りを持ち、久念の庵に赴き、庵の主人に対面して冢代の妹の由を告げ、
「私が今日来る事は一大事を問わん為なり。我が姉を火葬にせし時、定めて怪しき事がありけん。包まず説き示したまえ、もし、いささかでも偽り飾れば我が剣がここにあり。決して御坊を許すべからず。さあ打ち出したまわずや」と云いつつ刃を抜き持って、眼を配る勇婦の勢い。かくあるべしと予ねてより思い設けし久念はちっとも騒がず声をひそめて、

「御疑いは道理なり。冢代殿の火葬の事、始めを云えばしかじかなり、終わりは斯様斯様なり」とて、西門屋の後家に十両金を贈られし事の趣、その後、彼女の密議の頼み、退引ならぬ事の由をつまびらかに演説して、秘め置いたる白骨とその金を取り出して、

「それがし彼の時に思案を巡らし、後の証拠の為にもと、この骨二枚を隠し置いたり。これ見たまえ。骨の色が黒紫になりたるは毒害せられし印なり。しかれども冢代殿は何らの故に害されたまうや。その訳を知らずと云えども人の噂に伝え聞しに、関防人の金蓮助はお啓後家と密通し、お温の宿所にて出会う事、日として間断無かりしを冢代殿がやや悟り、水菓子売りの運蔵と云う者を語らい、両人でお温の宿所に至りて、奸夫淫婦を捕らえんとせられし時に冢代殿はその後家に胸を蹴られて気を失いたまひしが、病の元になりしと云えり。彼の運蔵に尋ねたまえば、つぶさに知るよし候わん」と告げるに竹世は頷いて、

「さらば御坊も私と共に、いざたまえ」と急がして、久念の庵を立ち出て、兩人やがてうち連れ立って運蔵の宿所に到るに、運蔵は商いにいでんと仕度をする折なれば、

「話をしている暇は無し。年寄りたる父親を養う為に候えば、今日は許させたまえかし」と云う事なれば、今更に竹世は強いて引き止めかねて、懐より金を取り出し、

「今日商いにいでずとも、これをもて父親を養えば、妨げあらじ」と云うに運蔵は喜んで、

「このお金だに候えば、一日なりとも引き付けて語らせたまえ。障りは無し。さて御尋ねの御用は」と問うに竹世は膝を進めて、

「我が姉がお啓に胸を蹴られし、その折の体たらくをつぶさに告げよ。いかにぞや」と問われて運蔵はちっとも疑義せず、初めお温に打たれたるその遺恨の始めより、道で冢代に行き会って、金蓮助、お啓を捕らえんと示し合わせし甲斐も無く、冢代はお啓に胸を蹴られて、遂に身罷りたりし事、斯様斯様と告げ知らせれば、竹世はしきりに嘆息して、

「しからんには運蔵も久念坊と諸共に、証人になってたべ。私は主君へ訴えて、悪人どもに恨み

を返さん。いざ」とて、やがて先に進んで、遠近の館に立ち帰り、久念と運蔵はその身の部屋に留め置いて、俄かに一通の訴え文を書きしたため、すなわち主君の遠近殿へ金蓮助、お啓の悪事の由をつぶさに訴え申しけり。

※香花(こうげ): 仏前に供える香と花。華香(けこう)。こうばな。

○これにより遠近の御館では冠者の太郎忠道主、重役らを召し集えて、竹世の訴えの由を告げ知らせ、「この儀、いかにあるべし」とて、既に評議に及ばれけるに、重役らは予ねてよりお啓に賄賂を多く受け、交わり持つとも浅からざれば、理非を分明に正す者無し。久念が隠し置きしと云う白骨を冢代の骨なりとも定め難く、運蔵はお温に打たれし遺恨を返さん為にのみ、無き事を云うなるべし。彼は証拠ありと云えども、その証拠定かならず、竹世の願いは立ち難からんと云う者のみぞ多かりける。重役らに支えられ、忠道は是非を定めかね、事難渋に及ぶ由がお啓の方に聞こえしかば、なおも財を惜しまずして多く賄賂したりしかば、いよいよ竹世の訴えは無証拠に定められ、訴え文を返されけり。これによりお啓、金蓮助らはますます忌みはばかり事無く、日毎にお温の宿所に集って、酒うち飲んで日を暮らしぬ。

さる程に竹世は願いが叶わねば、憤りを遣る方無く、「領主が正す事のならば、我れが自ら正さん」とて、既に思案を定めしに、明日は冢代の七七の忌日にもなりしかば、例の下部に云い付けて、五六升の茶飯を炊かせ、汁、菜の物も用意して、金蓮助の宿所へ運ばせ、その身もやがて彼処に至りて、金蓮助を招き寄せ、

「我が姉の四十九日の違夜(忌日の前夜)にも早なりぬ。よって辺りの人々に茶飯を振る舞わんと思うなり」と云うを金蓮助聞きながら、

「お温にこそ世話にはなりたれども辺りの人にはさも無きに。うち捨てて置きたまえ」と云うに竹世は頭を振って、

「此の度は世話にならずとも、後々の為なれば、私が自ら迎えて来ん。」さはとて、やがて向こう三軒両隣へ赴きつつ、お温を始め人々を伴い来て座敷へ招じ、自ら飯の給仕をして懇ろにすすめしかば、皆快く飲み食らいして、暇乞いして立たんとするを竹世は「しばし」と押し止め、

「各々は緩やかに座したまえ。ちと証人に頼みたき事あり。この中に手(文字)を良く書く人がありもやるか」と尋ねれば、「向かい隣の全衛門こそ、能書なれ」と云うにより、硯箱を辺へ差し置き、

「私は今、事を正す一議あり。それを書き取りたまえかし」と云いも終わらず、つと立ち寄って、金蓮助の襟髪掴んで膝の元へしっかりと押し据え、

「痴れ者。肝太くもお啓後家と密通して、我が姉を毒殺せしに、事の詛を白状せよ。云わずば目に物見せんず」と懐剣きらりと引き抜いて、胸の辺りへ刺し付けば、金蓮助はひどく驚き恐れて、遂に陳ずる事、叶わずお啓と不義の始めより、お温の一議に従って冢代を殺せし事の趣を少しも漏らさず白状するを竹世はそのまま全衛門にしかじかと書き留めさせ、「許し難き、此奴が大罪。願うは各々、証人になりたまいな」と声を掛け、金蓮助の細首を水もたまらずかき落せば、お温は恐れて腰打ち抜かし這って逃げんとする程に、竹世はうち見て声を振り立て、

「悪婆、逃げるとて逃がさんや。運蔵、久念、さあいでよ」と呼び張る声を聞きながら、台所に控

えたるその兩人が走り来て、お温の手を取り足を取り、押えて縄を掛けにけり。その時竹世はお温を責めて、事の元を問い正すに、お温はさう(左右)なく白状せず、身を逃れようとしたれども竹世はいかでか許すべき。切っ先を突き付けて、「命惜しくば、さあさあ云え」と責め懲らしたる勢いにお温は遂に陳じ得ず、お啓、金蓮助を引き入れて、冢代を害せし巧みの趣を残らず白状してければ、竹世は又、李衛門に云いつるまを書き留めさせ、

「久念、運蔵はここにあつて、お温をよくうち守れ。人々も今しばし、この所に居たまえかし。今一人の仇あれば、いでや其奴を討ち留めて、再び来て又、勞すべし。程はあらせじ待ちたまえ」と云いも終らず、忙わしく金蓮助の首▼引き下げて外の方指して馳せて行く。

○かくて竹世は西門屋の背戸の方へ赴いて内の様子を覗うに、店を預かる重手代が手水をせんとて背戸にいでしを矢庭に捕らえて動かせず、

「私は今、問うべき事あり。ちっとも隠さず実を告げよ。汝の主のお啓後家は宿所にありや、他行せしか。さあさあ告げよ」と急がしたる気色を見れば、左右の手に刃と首を引き下げたる体たらく、驚き恐れる重手代は齒の根も合わず、

「我が主の後室は先の程客あつて、そをもてなさん為にとて柴暮橋の仕出し酒屋へ連れ立って行きたまひしが、今頃はうちくつろいで酒を飲んで居られるならん。この儀に相違候わず」と告げるを竹世は聞きながら、「しからば汝も許し難し」と云うより早くひらめかす、刃の下に手代の首は落ちにける。

竹世はこれを斬り捨てにして、柴暮橋へ走り行き、仕出し酒屋の二階を目掛けて、真一文字に馳せ上れば、この時客は既に帰つて、お啓は一人柱にもたれ、楊枝を使って居たりしが、竹世を見て大きに驚き、立たんとするを立ち塞がり、

「西門屋の悪後家め。竹世を知るや。天の許さぬ姉の仇。観念せよ」と罵つて、引き下げ来たる金蓮助の首をはたと投げ付ければ、お啓は柔の秘術を出して蹴倒さんとしてけるを竹世は早く身をかまし、肩先丁と斬り付ければ、叶わじとや思いけん、二階の縁の手すりより身を躍らして飛び降りたり。竹世もすかさず首かい取つて、同じ所へ降りたつ程に、高さ一丈余りもありければ、お啓は足をうち挫き、ようやくに立ち上がるを起こしも立てずひらめかす猛き竹世の刃の稲妻。お啓は首を打ち落されて、骸は後に倒れけり。

竹世は既に姉の仇を思いのままに討ち留めければ、二つの首を引き下げて、元の宿所へ馳せ帰り、隣人らにしかじかとお啓を討ちし由を告げ、敵の首級※を姉冢代の位牌へ手向けて、回向を凝らす勇婦の孝悌勇ましく、いとど哀れもいや増せば、隣人らは感涙を押し拭いつつ、諸共に皆念仏を唱えけり。その時竹世は諸人にうち向かい、

「各々が証人たる上はこれより御館へ帰り参つて、事の趣を訴え申さん。しかれども重役らは皆西門屋の味方なれば、我が身は安穩なるべからず。そはとまれかくもあれ、二人の敵を討ち留めれば思い残す事は無し。お温はしばし助け置き、領主の▼計らいに任せまつらん。久念、運蔵は宿所へ帰れ、隣人らは大義ながら私と等しく御館へ参つて、書き留めたる金蓮助、お温の白状を聞こえ上げ、およそは今日の趣をつまびらかに申してたべ。いざさあさあ」と急がして、やがてお温を引き立てさせ、御館を指して急ぎけり。

※首級(しゅきゅう):《中国の戦国時代、敵の首を取ると1階級上がったことから》討ち取った首。しるし。

これよりの後、竹世の伝はなお長かり。五編の卷数尽きたれば、第六編に著すべし。それ天道には善に幸いし、淫に災いす。利の為に事を巧み、人を虐げ、己の欲を欲しいままにする者は一旦事を成すと云えども、その破れるに及んでは命を失わざる者無し。酒は礼に始まって、乱に終わり。色は心の動くに起こって、迷わざれば楽しとせず。この一編は唐国にても金瓶梅に綴り広げしを人がもて囃せし由を聞こゆ。予は斟酌※の筆を操って、勸懲を旨とせり。見る人宜しく思うべし。目出度し、目出度し。

※斟酌(しんしゃく): ①相手の事情や心情をくみとる。②あれこれ照らし合わせて取捨する。③言動を控えめにする。遠慮する。

作者曰く

予が著せし草紙物語の二三十年に及ぶ物は或いは火に掛かって、その板烏有(消滅)となり。又はその板半ば失せて、全からざるによって、久しく刷りいださざるもありと聞きゆ。しかるに似非商人がさる板を穴繰り求めて、欲しいままに足らざる所を補い、挿画を描き替えて、新板の如くならしめるに、いささかも予に告げず。まして校合を乞うこと無く、只、予の名を売って、人を欺き、利を射んとする者なり。例えば化競丑三鐘並びに括頭巾縮緬紙衣など、皆彼の補刻の物にて、予の名ありと云えども、予が校合を経ざる物なれば、予が作にして予が作に非ず。具眼(見識ある)の人は見て察したまうべけれども、若き人が古き作を見知りたまわずば、欺かれて、予の新作ならんと思いたまうもあるべし。凡そ、再版補刻の草紙には予が新序を添えて、その由を断るべし。新序無きは偽刻なり。欺かれたまうべからず。

※具眼(ぐがん): 物事の本質を見抜き、是非・真偽などを判断する見識をもっていること。

<翻刻、校訂、翻訳: 滝本慶三 禁転載 底本/早稲田大学図書館所蔵資料>